太　　玄

太　玄　会

太　玄（会報74号）　目　次

一、あいさつ

垣内楊石会　長……1

蕗野雅宣理事長……2

金丸鬼山事務局長……3

二、第59回太玄会書展

日程表……4

役員及び各部部長……4

入賞・入選者……5

会場・審査風景……8

授賞式・祝賀会……9

作品解説・席上揮毫……10

特別講演……12

謝　辞　高山爽快（書星会）……22

二、平成29年度総会

資料掲載……23

総会・懇親会風景……32

総会記……33

四、太玄会所属団体のこの一年の活動……34

（平成28年10月～平成29年11月）

五、太玄会所属団体の活動予定……41

六、特　集

石坂翔鳳（真仙会）……42

近藤寿泉（菅菰会）……43

長谷川渓華（書人社）……45

長谷川香濤（書星会）……46

編集後記　広報部

太玄会書展所感

会長　垣内楊石

書を愛し、書に生きる私たちにとって最も身近で不朽の成華である第五十九回太玄会書展が万端滞りなく成功裡に終了したことを有難く思っております。この太玄会書展は所属する十五団体の会員が日頃研鑽した結実となる作品を発表する場であり、その機会でもあります。本展に篆・隷・楷・行・草・仮名・調和体の七書体の書が出品されていましたが、いずれも書の古典を拠りどころとした創意、個性の溢れる作品でありました。このことは太玄会の主旨、理念にも適うものであります。書風としてではなく、見る■に際立ったのは役員の大作でした。率先垂範して大作力作に挑む姿勢は太玄会の特長であります。厳正なる審査のもとに選ばれた入賞作品も参観者に熱い視線が注がれ、どの作品も好評であったことはうれしいことであります。

この会期中に催された作品解説や席上揮毫は太玄会ならではのイベントとして、選ばれた役員諸賢の示された高い見識と力量の披露は何ものにも勝る研修として参観者に深い感銘を与えました。会員の資質の向上、技術の進歩に役立つことは言うまでもなく、今後の太玄会の充実発展を占うものとして貴重であることを痛感いたしました。私は会期中、東京に在住し、初めて太玄会書展に日参しました。そこでこの太玄会書展のために連日、朝早くから終日運営業務にあたられる役員、係の先生のお姿を見て、出品者の目に触れない所で大変な苦労をされていることを知りました。突如として襲った東京の降雪で足もとを奪われ、交通機関もなく、難儀中であったのにもかかわらず、早朝から来られ、■仕事に携わられる人達の姿に涙が出ました。作品を出品するだけで責任を果たしたようにこれまで思っていたことが、恥ずかしく、この太玄会書展は目に見えないところで、役員の方々や係の多くの方々の献身的な苦労やお世話があることを知り、心から感謝した次第であります。

第59回太玄会書展を終了して

理事長　蕗野雅宣

昨年の四月理事会及び定例総会において、理事長を拝命いたしました。書活動、自分史を回顧してみますと、手元にある第2回太玄展入賞目録に、学生展小学生の部に名前を見ることが出来、第17回展より一般部公募に出品を始めています。以後太玄育ちを自負しながら歩んでまいりました。

その間多くの先輩、諸先生よりご指導、ご鞭撻を賜わっての今日であることに、深く感謝を申し上げます。

創立以来著名な諸先生が理事長として、その手腕を振るい発展を遂げてまいりました。その重責を考えるとき私で……の思いにいたり身のすくむ思いでもあります。鞠躬盡瘁（身も心もささげる）この言葉を実践して行くしかないと心に決め頑張ってまいります。

さて第59回展、無事終了することが出来ました。今回展より抽選結果によっての会場、二階三室横並びの展覧となりました。学生選抜展を倍増、解説会席上揮毫を行ない、高木厚人先生のご講演「かな書の魅力」＝古典そして現代作品＝も行わせて頂きました。事務局長を中心に各部担当の諸先生方のご盡力に只々感謝です。

今年は得に寒さ厳しく、三日目には上野でも多量の降雪、観客動員には厳しい結果となってしまったことが残念ではありました。

来年は第60回、記念の年会員各位のご理解、ご協力を切にお願い致します。

平成二十九年度事業を終えて

事務局長　金丸鬼山

平成二十九年度の事業計画に基づき新任の会長、理事長の下、第1回運営委員会、検討委員会、部長会と会議が開かれ、第五十九回太玄会書展の開催運営は無論の事、二年先の第六十回記念太玄会書展、並びに創立六十周年記念祝賀会の準備に係る実行委員会の設立、等が討議され此処から今年度事業が始まる、と言う使命感を覚えました。

扨て第五十九回展から高い壁面の都美術館の展示効果を上げる為、会員以上の作品に縦八尺サイズを規定に盛り込み作品を促したが、稍不完全燃焼の感は有りました。第六十回展では大いに挑戦して欲しい。併催第二回学生選抜展の出品数を前回の倍数四〇〇点としました。集客数の増加と書道教育を目的としたこの企画、学生部を新たに設立し、きめ細かい対応をと考えました。

又、会期中のイベントも、作品解説、席上揮毫と毎日実施しました。生憎の大雪に祟られた二日間は参加数が若干少なかったものの開催日全て盛会で有った事を書き留めて置きます。今回の特別講演は日展会員、高木厚人先生による「かな書の魅力」＝古典そして現代作品＝と題した講演で、漢字作家の多い太玄会としては大変貴重な経験でした。毎年素晴らしい先生方の講演を頂けるのも、西村東軒先生を始め宮負丁香、伊場英白先生の人脈に依るものと深く感謝しています。

この様に役員並びに事務局、部長会、会員の協力により第五十九回太玄会書展は無事終了する事が出来ました。ホットする間もなく、第六十回記念展、創立六十周年記念祝賀会と既に準備が進められて居ます。皆様には一層のご協力をお願いし、今年度の報告と致します。

第59回　太玄会書展

日程表

年月	日	曜	作業内容	時間	会場	担当部
291	8	金	搬入	10:00〜12:00	都美搬入室	搬出入部
	9	土	会員賞選考	11:00〜	都美審査室	審査事務部
	10	日	鑑別・審査	〃	〃	〃
	16	月	予備日			
	17	火	予備日			
	18	水	陳列	11:00〜	都美展示室	陳列部
	19	木	開会	9:30〜17:30	〃	会場当番
	20	金		〃	〃	〃
	21	土		〃	〃	〃
	22	日	授賞式 祝賀会	16:30〜 18:00〜	精養軒 〃	渉外接待部 褒賞部 祝賀会部
	23	月	開会	9:30〜17:30	〃	会場当番
	24	火	最終日 作品撤去	9:30〜15:00	〃	陳列部
	25	水	搬出	10:00〜12:00	都美搬入室	搬出入部

役員及び各部部長

名誉顧問	梅原清山	
常任顧問	福田丞洲	
常任顧問	田中鳳柳	
常任顧問	笠原聖雲	
会長	垣内楊石	
副会長	石川流芳	
副会長	西村東軒	
董事	春藤大耿	
理事長	蕗野雅宣	
副理事長	小原天簫	
副理事長	宮負丁香	
事務局長	金丸鬼山	
理事	鈴木暎華	
理事	瀧沢曲峰	
副事務局長	伊東玲翠	
副事務局長	江原見山	
副事務局長	伊場英白	
副事務局長	小出聖州	
理事・総務	石井光華	
理事・総務	石島廻山	
理事・総務	遠藤有翠	
理事・総務	木全珠香	
理事・総務	髙橋江東	
理事・総務	植木蒼穹	
理事・総務	鎌田龍祥	
理事・総務	中尾勝子	
監事	高橋心行	
監事	中田珪川	
会計部長	下谷蘓雪	
事業部長	蕗野祐涯	
広報部長	荒井湧山	
渉外接待部長	石井蕙園	
図録部長	伊藤慈恩	
搬出入部長	山口香葉	
審査事務部長	山村鳳羽	
陳列部長	大場大幹	
褒賞部長	小泉興起	
祝賀会部長	大河原由佳	
学生部長	佐々木幸葉	

第59回　太玄会書展入賞・入選者

理事の部

太玄大賞（五十音順）

大森鳳城（書人）　清水美代子（真仙）　須田瑞兆（研友）
髙山爽快（書星）

審査会員の部

太玄賞（五十音順）

柏原桂雪（青龍）　下原春美（書王）　田辺心苑（書星）
松橋多恵（真仙）　望月俊邦（書人）

全日本書道連盟賞（五十音順）

宇野静香（真仙）　小和田恵風（九龍）　皆川蘭香（書星）
山口杏園（菅菰）　山田光倫（高友）

会員の部

特別賞（五十音順）

一万田慶舟（真仙）　遠藤昌運（書人）　菊地梨祥（菅菰）
佐久間輝珠（書星）　三浦利恵（書王）

奨励賞（五十音順）

石川翠鈴（九龍）　川名僊苑（書星）　髙﨑梅仙（書人）
寺澤紀芳（真仙）　舛田白露（燎原）　吉田翠苑（書研）

会員新人賞（五十音順）

牛尾雅高（高友）　大須賀竹仙（書人）　垣内楊玄（九龍）
小出翠深（鼎墨）　佐藤美佐（真仙）　田邊溪祥（菅菰）
時田大祥（書星）　芳賀光珠（書星）

準会員の部

推選（五十音順）

石井光子　泉桐艶　伊東紫艶　上野華雪
牛澤智水　遠藤桃葉　尾﨑清爽　垣内仁美
加藤暉川　川井韶瑞　沓澤絵梨　小松秋香
古谷野星麗　坂栄華　佐藤紫泉　下城蓼華
下間佳璋　髙野秀影　髙橋玉泉　田島由美子
玉井思醉　遠矢虚圓　冨本琇瑩　藤田寿仙
町野蘚萠　松井芙蓉　峯岸美知子　宮川彩波
宮澤溪翠　宮地豊苑　宮本祥太　山﨑のり子
吉田庭鳳

準推選（五十音順）

赤石爽楓　秋葉智仙　秋山硯光　浅田広樹
石原成雅　板垣仙露　菴澤御櫻　上野桂尚
内田黄鳥　海老沢京香　遠藤紫悠　大木操守

大嶋瑞禾　小川爽歩　小川泰子　掛川和光
上西秀峰　亀山白沙　木津純子　黒木秀麗
小暮兆琳　小菅啓子　斉藤浄心　佐々木玉峰
猿田紫陽　沢田信桐　清水嶺花　鈴木堅心
鈴木光鶴　鈴木万深　髙橋紅葩　田中春敬
寺﨑龍軒　中元玉蘭　中山志峰　西原彩華
橋本早苗　東山彩翠　藤田晶洋　藤原光水
細渕金杏　増田澄靖　増渕香泉　松永愛泉
宮本翠邦　村上静竹　森沢萠翠　守田禎香
矢野晃鶴　山内聡華　山形翠簫　山岸信彦
山口京子　要田唯華

公募の部

特選（五十音順）

荒井蓬月　安養李艶　石井宗艶　石川光寵
石川惺楓　伊藤聖夏　井上紀秀　植松走風
牛口仙桃　薄木逸醉　江上桐佳　岡野ひろみ
岡山旭洋　鎌形美容　草間清晨　毛塚佳泉
小松﨑友紀　坂　貴大　佐藤響雅　島本春弥
下間明燈　荘保浩子　鈴木光濟　仙石良子
高橋希兆　田中さち子　遠山陽江　豊田光暁
中山智加江　西方勇玹　西澤緑風　西端　茂
二瓶花僊　平野渚秋　福塚光徳　福本明暢
松丸流雲　横溝早苗　渡辺仁美

準特選（五十音順）

阿部　寛　荒井桃子　飯野秀一　石井茜音
石井鏡子　石井起和　井出清玉　大石由香里
大熊　勇　大野遥佳　小澤奈穂美　小野翠香
勝畑喜市郎　加藤紅苑　金井薫姚　川上金澄
神田絹香　木下正覚　久保田渓堂　窪田静花
小出厚隆　小杉恵美子　後藤詩織　児山九聲
斉藤敦子　志村　恵　下間果穂　杉山葉月
杉山雅子　鈴木教子　鈴村早秀　薗田紫菀
高野房枝　高橋越雲　髙橋幸江　竹中光順
竹本萩嶺　田所佐季　玉井香敬　徳永慈峡
鳥海理恵　夏目紅恵　奈良京華　根本恵和
根本由紀　野島絹子　長谷川洸春　膝附史穂
平田光空　広沢光香　福島征英　藤田靄香
藤永真里　藤原博子　本間雅鳳　増田千鶴
三浦道子　山井奈々子　山上尚子　山田緑水
山本紫香　山本碧霄　由良紀明　吉田　愛
吉野裕子　和田光翠　渡辺佳祥

入選（五十音順）

新井美帆　荒原香堂　有馬優菜　石井梅香
石川清香　石川青流　石田正道　磯谷ひなた
伊東芳苑　伊藤幹夫　稲生妙子　井上正子

井堀咲麗子　今井香澄　岩渕福仙　臼井典子
浦崎沁雅　浦田実佳　瓜田余響　榎本輝映
榎本秀艶　大川華風　大河原佳子　太田君江
大塚美代子　大野光照　大場青峰　大森栄芳
大山紫彩　岡島寿石　岡田信来　岡本美佳
小川兆史　小川悦雄　小澤洋子　小野田子雪
甲斐谷朋隣　風間翠泉　片岡久美子　片倉　幸
片山廣楓　金子きみ代　狩生久美子　川島遙青
川谷淳一　川端紫雲　工藤紀子　国吉和子
熊谷　弘　栗本　暁　黒田真弓　小出春扇
神山秋子　後藤爽紀　此永百花　小林富子
小林ひな子　小森カズエ　斉藤光天　齋藤天聽
坂口白峰　櫻井美津枝　櫻田明道　佐々木清美
佐々木芳華　佐藤　英　佐藤榮壽　佐藤摂子
佐藤保恵　佐藤優衣　佐鳥光浩　眞田星鳥
沢田星耀　椎　霞扇　重田江彩　清水享鶴
下原春樹　仁多玲子　末永美和　鈴木麻美
鈴木朱艶　鈴木白明　須藤隆史　染谷君恵
高内芝蘭　高木睦子　高橋翠嶺　高松　剛
高柳浩美　竹内百紀江　竹田和花　竹渕　晃
田中春曄　田中元光　田中裕也　田中玲子
谷　俊子　田村游古　段野真希　千野霜月
津山紫陽　寺岡恵風　寺崎登美子　東瀬彩花
豊嶋智勇　長尾桜春　長尾和香　中込雅恵

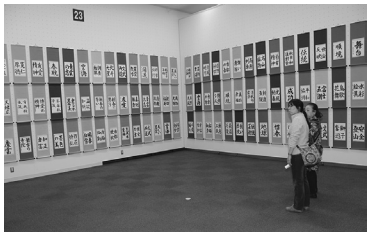
中沢則子　仲下彩希　中島みつ子　長橋葉鴿
南雲鷺草　西岡美知江　能瀬ゑみ　長谷川恵子
長谷川理華　林　葵丘　平田玲憲　廣瀬美保
深川兆瑤　深野幾与子　福岡華泉　福里清晨
福田佳子　福本澄鮮　藤崎澄瑩　古川紫虹
古谷幸子　穂積可奈　本間祥雲　前口紅泉
舛田昌玄　増田兆毬　松沢上清　松野浩範
松村祥風　松本娟秀　丸山兆基　三木智加
水谷衣里　水吉福子　宮田祥習　宗島余光
森　敬子　森　千花　矢田貝恭子　山浦柚美
山田静光　山田緑亭　山野井佳穂　山本縁里
横瀬晃子　横瀬克江　吉田圭秀　吉田直美
吉村菜採　依田紅瑞　若麻績實豊　若麻績弘道
渡邉絵里　和田靖子

第59回 太玄会書展　会場風景

平成30年１月20日㈯～26日㈮ 会場：東京都美術館

会場風景

作品陳列風景



第２回学生選抜展

役員室

第59回 太玄会書展　審査風景

平成29年１月９日㈫～10日㈬ 会場：東京都美術館

審査２日目

審査１日目

会員賞選考風景

審査部スタッフ

審査２日目

当番審査員

会員賞選考委員

第59回 太玄会書展　授賞式・祝賀会

平成30年１月21日(日)16時30分開始　会場：上野精養軒

授賞式

運営委員

審査事務報告
山村鳳羽審査事務部長

挨拶
蕗野雅宣理事長

開会の辞
宮負丁香運営委員

授賞式風景

今年度当番審査員

閉会の辞
小原天簫副理事長

授賞式風景

太玄賞受賞者

太玄大賞受賞者

祝賀会

乾杯の発声
読売書法会事務局長

祝辞
全日本書道連盟理事長 星弘道先生

挨拶
垣内楊石会長

開会の辞
石川流芳副会長

閉会の辞
西村東軒副会長

祝賀会風景

作品解説

江原見山副事務局長

西村東軒副会長

石川流芳副会長

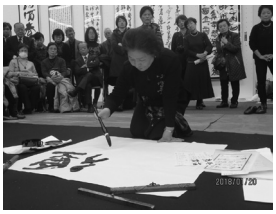
宮負丁香副理事長

海野十方理事・運営委員

小出聖州副事務局長

※会期中は午前11時から６名の役員が個性溢れる解説を行い、来場者に展示作品の特長を丁寧に述べている。

席上揮毫


長谷川渓華理事・実行委員

近藤寿泉理事・実行委員

石坂翔鳳理事・実行委員

蕗野雅宣理事長

小原天簫副理事長

垣内楊石会長

下谷蘇雪理事・運営委員

大場大幹理事・運営委員

伊藤慈恩理事・実行委員

荒井湧山理事・実行委員

金丸鬼山事務局長

※期間中、第１室において14時から11名の役員が揮毫を行った。各自、個性ある作品を披露し、来場者も書き手の呼吸に合わせて見入っている。

第59回　太玄会書展　授賞式・祝賀会

平成３０年1月21日(日)18時より、上野精養軒にて授賞式ならびに祝賀会が開催された。授賞式は、厳かな雰囲気の中で進み、授賞者全員の呼名と特別賞は一人ひとりに賞状が授与された。また、祝賀会では、多くの来賓をお招きし盛大に開催された。

授賞式　挨　拶　　蕗野雅宣 理事長

まずは入賞入選された皆様方、本当におめでとうございます。今回受賞された方は、これまで研鑽し続けてきたことに対し、まずご自分を褒めてあげてください。これは、師匠はじめ書友の存在があり、その中で研鑽あってのことと思います。太玄会は、できる限り内容と質において書格の高いものを求めることを会の目標としています。来年は６０周年記念ですので、本日の受賞を糧として一段と良い作品制作に励んでいただければと考えます。

祝賀会　挨　拶　　垣内楊石 会長

本日は多くのご来賓のご列席を賜り、本当にありがとうございました。また、日頃より太玄会の活動に温かいご支援を賜り厚く御礼申し上げます。今や政治経済において様々な問題がございます。私たち書道界にとりましては高齢少子化の問題があげられます。そのため、書道の愛好者が少なくなっているのではないかと危惧しています。学校における教育課程、学習指導要領での書写書道の取り扱いなどを考えると、私たち太玄会だけでなく、「日本全体の問題なのではないかと思います。書は、日本の心、日本の美を象徴する偉大な芸術だと考えます。このことについて、自分の問題として、太玄会としては会の問題として、みんなで力を合わせて解決していかねばならないと思います。

祝賀会　祝　辞

日展理事、全日本書道連盟理事長　星　弘道 先生

第59回太玄会書展の開催誠におめでとうございます。ただいま垣内会長ご挨拶を伺い、まさにその通りだと感じております。今、私たちは書道界あげて今後どのように進むべきかを問われている時代だと思います。そういう中で太玄会は、15団体が一つになって来年は60周年に向けて進まれていることと存じます。展覧会については様々な捉え方があるかと思いますが、現在は展覧会がないと進歩がないのではと考えます。２０２０年に「東京オリンピックが開催されますが、そこには競い合いがあってこそ人間は限界まで挑戦するものです。まさしく書道界も同じだと思います。書は、その人が一生涯を通してどう展開するかを問われる芸術だと思っています。そういう意味で、展覧会を通して切磋琢磨し、各自が進化を問い合うことが意義あることだと考えます。太玄会の15団体がそれぞれ展開することは、まさに理想的なスタイルだと思います。これからも書道団体としてあるべく姿を示していただければと存じます。

特別講演

演　題：「かな書の魅力」＝古典そして現代作品＝

講　師：日展会員　高木厚人先生（杉岡華邨先生師事、臨地会理事長、大東文化大学教授、朝日現代書道二十人展　メンバー）

仮名の成立

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました高木厚人と申します。今日は、仮名の世界も結構面白く、こんなに素晴らしいものもあるということをお話したいと思います。書というとまずは漢字を小中学校でも書写の時間で意識せずに学びます。そこへ高等学校に入って書を学ぼうとすると突然仮名が現れ、何か異質なものという印象を受けるのですが、考えてみると仮名というのはもっと我々の身近にあるものだと思います。そう考えると日本の歴史の中で最も偉大な革命であり、仮名が生まれたことが最も文化的な創造だったのではないかと思っています。

もともと日本人は自分たちの言葉を持っておらず、中国が高い文化を持っていたので、聖徳太子の時代以降に遣隋使や遣唐使で日本を代表する留学生が中国で様々なことを学び日本へ持ち帰っていました。例えば、空海や橘逸成も中国へ行きましたが、そこではまず宗教的なことを学びます。宗教には科学、医学、哲学、文学等がすべて含まれています。さらに政治等の仕組みも含めて隋唐時代に他にも多くの留学生が派遣され、国造りの基礎にしていました。奈良時代前後の日本の役人のステイタスは、まず中国語を話すことができ、漢詩漢文を使いこなし、記録もすべて漢文で書けることでした。ですから、奈良時代の前半では仮名というものは見向きもされず、中国文化を憧れる時代がずっと続きます。当時、貴族社会で有名だった遣唐大使（現在の外務大臣）の菅原道真が、魏志倭人伝に漢字の音を当てて書かれている例もその一つです。

講師　高木厚人先生

会場風景

ところで、日本語には訓読みと音読みがあります。音読みは中国の発音をもとにした読み方、訓読みは日本古来の読み方です。漢字を正式な文字とみなして「まな」（真名）と呼ぶのに対し、その訓読みに中国語の発音を当てはめる読み方（例えば「ひと」を「飛度」「悲東」などと表記）が当時盛んに行われるようになっていきます。つまり、漢字（真名）の音を使って言葉を表記する、それが「かりな」「かな」（仮名）というものです。また、楷書をそのまま用いた仮名を万葉仮名・

男手（真仮名）と呼びます。平安時代に入り、行書・草書体がさらに崩された「草仮名」、これをさらに大胆に略したものが「女手」（後の平仮名）です。正倉院文書の一部にはこのような表記がたくさん見られます。日本の歴史で最も文化的創造と申したのは、このような理由からであります。

遣唐使廃止による日本文化の見直し

時は８９４年、ついに遣唐使を廃止することになりました。これは中国にお金をかけて優れた人材を送っても、中国内が荒れており、相当するものが得られないということからの国交残絶です。しかし、同時に今度は日本の文化が盛んに見直され、貴族社会ではこれまで漢詩漢文が中心に書かれたものが、平安時代中期から後期にかけて和歌が取り入れられるようになります。併せて仮名の名品がたくさん現れてきました。なぜ、この時代に仮名の名人が現れてきたのか。当時、貴族で一番有名なのは藤原道長でしたが、藤原北家の権力を維持する方法は、娘を天皇家に入内させることでした。例えば、藤原道長は長女の彰子を八歳の時に一条天皇へ入内させます。

昔は一夫多妻で天皇にも何人も女性が嫁いでいましたが、一条天皇には定子という女性が先に嫁いでいました。天皇家とつながり男子が生まれれば次の天皇へ繋がっていきますので、有力貴族は競って娘の教育に励みます。記録によると娘を嫁がせるためには、世話係も含めて約３０人のチームが天皇家に入ったそうです。そういうチームが天皇の周りにはいくつもあるわけです。彰子のチームには、彼女を教育するための家庭教師役もおり、それが紫式部でした。対して定子には清少納言が付いており、天皇を中心にいくつものサロンがしのぎをけずるわけです。その中でいかに天皇に気に入られる女性になるかが勝負となります。その決め手は、まず和歌が読めなくてはいけません。娘たちは、当時流行していた古今和歌集の１１００首を全部暗記するくらい教育されました。その他に琴の演奏、自分の歌をきちんと書けること、つまり天皇に気に入られる文字が書けることが当時の条件でした。また、天皇中心のサロンの規模は歴史学者によりますと、殿上人と言って天皇の歌会に参加できる人だけでも４００人位はいたと言われます。天皇に嫁がせた娘に好意を持っていただくため、紫式部が「源氏物語」を作り、彰子に覚えさせて天皇の前で話をして差し上げる、続きはまた明日といったやり取りを通し、天皇を引き留めなければなりません。これは非常に熾烈な戦いでした。

講演風景

古今和歌集の写本が多く書かれ理由

当時は古今和歌集が重要視されましたが、これは紀貫之を中心に編纂されたものです。もちろん当時は全部手書きですが、記録によりますと紀貫之の自筆本２巻、天皇に献上した奏覧本１巻、合わせて３巻しかなったそうです。当時、大変人気の高かったものですので、多くの貴族たちが入手を希望しましたが、そのためには誰かに写本してもらわねばなりません。依頼するには、まず紙を揃えることが必要です。当時、紙は大変貴重なもので古今和歌集二十巻１セットとして、５０首で約４～５ｍが必要とされ、二十巻で約１００ｍ分を用意しなくで

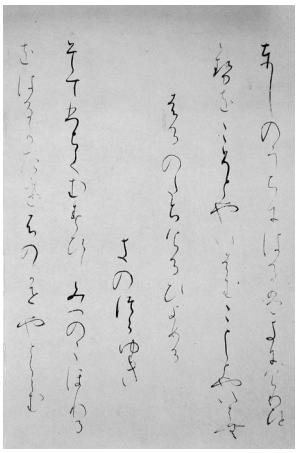
はなりません。依頼者は中国から輸入した唐紙などを揃え、当時一流と言われた書き手に依頼します。当時このようなことがしばしば行われ、古今和歌集の写本は最高の贈答品でした。現在、一部の作者しか分かりませんが、１０５０年ころから約５０年間に少なくとも３５種類の古今和歌集が書かれていることが現存の断簡から分かります。この殿上人の約４００人ほどの狭い社会ですから、おそらくどこの誰が荒野切風、本阿弥切風の写本を持っているなど、当時は誰もが知っていたことでしょう。すると次に依頼される書き手にとっては、有力貴族から大金をかけて紙を用意されるわけですから失敗は許されず、しかも今までとは異なった新しい書きぶりで書かねばなりません。書き手にとって、それはかなりのプレッシャーであったかと考えられます。

例えば写本の中には「荒野切」があります。これは3人の手で書かれたもので、当時最も優れた書き手のチームであったと想定されます。その後も同じような書きぶりの書が沢山残されていることから、この第一種、第二種、第三種のそれぞれの先生を中心としたグループは、その後も大きな影響を与えています。他にも「本阿弥切」、「関戸本古今集」「曼殊院本古今集」などもあります。

現在、これらの古筆は仮名を学ぶテキストとして長い間取り上げられています。仮名というとどれも小さい字でサラサラ書かれていると思われがちですが、よく見ると非常に動きに富んだダイナミックなものもあることが分かります。今日はそのあたりを皆さんに見ていただきたいと思います。前半に古典はこんなに面白いということをお話しさせていただきます。

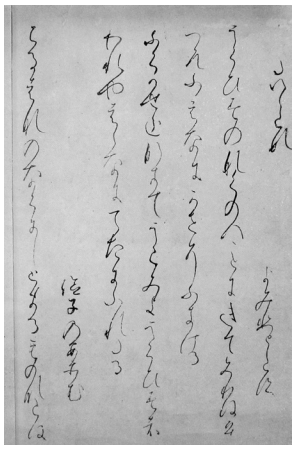
様々な古筆

まず荒野切についてですが、古今和歌集全二十巻を3人で寄合い書きをしています。第一、九、十、十一、二十巻はチームリーダーである「荒野切第一種」の筆者が担当しています。また、「荒野切第二種」の筆者は第二～八巻、その他を「荒野切第三種」の筆者が担当しています。このような分担方法は歴史的な書物の編纂でも見られ、このしきたりに則って書かれているようです。古典にはそれぞれの特徴がありますが、「荒野切第一種」【図1】は平安仮名の基本と言われ、優美で貴族的でゆったりした雰囲気が感じられます。仮名は、墨を継ぎ一筆書きで渇筆になるまで書き続けますが、その変化を「源氏物語」「枕草子」の中でも奇麗な景色に見えて素晴らしいと記述されています。仮名が奇麗に見えるのは、墨継ぎから墨継ぎまでの変化だと思います。「荒野切第一種」は、墨継ぎから渇筆へ向かう際、墨を絞り出すことで高い山から一気に谷底まで落ちるように、墨が次第に減っていくのではないスリルを感じさせるところが至るところで見ることができます。



【図１】荒野切第一種

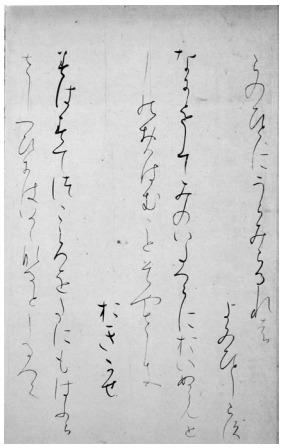
次に「荒野切第二種」【図2】ですが、私は当



【図２】荒野切第二種

初、連綿がきつくしつこい感じや粘っこくてアクが強いという印象を持っていました。しかし、以前ある新聞で昭和天皇の侍従長であった入江相政（すけまさ）先生が、『平安時代の仮名古典の中で最高なものは「荒野切第二種」である』と絶賛している記事を読む機会がありました。常に真跡を見る機会の多い方ならではの感想だと思い、とても印象的でした。その後に「荒野切第二種」の真跡を見た時、初めて「薫り（香り）」というものを感じたのを覚えています。これまでに沢山の仮名の真跡を鑑賞してきましたが、この「薫り（香り）」を感じたのは「荒野切第二種」だけでした。印刷本では全てに墨がのっているように感じられますが、真跡を観ると墨は結構少なく、何とも上品な薫り（香り）がするのです。印刷本で判断するのではなく、やはり本物を見ることが大事であることを感じさせられました。

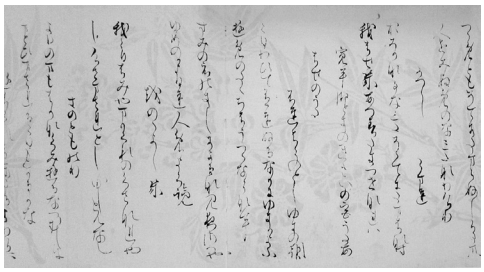
そして「荒野切第三種」【図3】ですが、仮名の初学者には最もふさわしい古典として有名です。現代の平仮名にとても良く似ていて、親しみ深いことも理由かと思います。また、同じ系統の「蓬莱切」は平安時代から初学者のテキストとして千年近く伝わっているものです。高等学校の教科書でもよく取り上げられています。



【図3】荒野切第三種

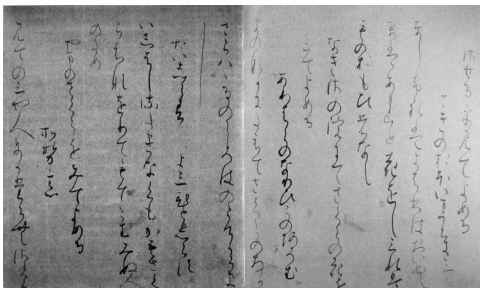
荒野切第一種、第二種、第三種は仮名が女手として完成された頃のものですが、これ以降の時代は徐々に変化を求めていくようになっていきます。その後の古今和歌集の写本でも、何か異なった工夫がみられ、そのことが仮名の発達にもつながっていきます。

例えば「本阿弥切」【図4】は線にエッジが効いた線質です。何文字も続けて書いているところもありますが、一文字一文字を紙に刻んでいくような強さが感じられます。平安時代では、この古典の文字は非常に小く、一行に一首を書いてしまうほどなのですが、懐が広く文字の構えが大きく見えます。筆者はとてもこだわりのある魅力的な方だったと思います。穂先をねじ込んでいきながらその後に筆を引き抜くなどの見せ場もあるため、強さ一辺倒ではないところが特徴だと思います。以前、日比野五鳳先生は『「本阿弥切」を学んで上手くならない人はいない』と話されていていたほどの名筆です。

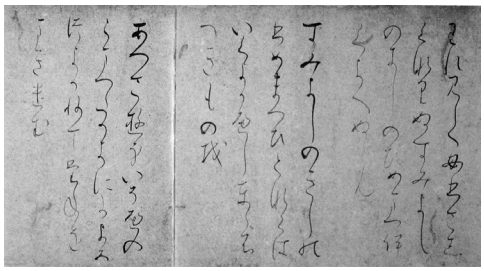


【図4】本阿弥切

「関戸本古今集」【図5】は、名古屋の関戸家に伝わったことから命名されましたが、かなりの長い連綿が特徴です。以前、日比野五鳳先生は学ぶところをきちんと選ぶことが大切だと話されていましたが、作品制作上、作品の場面を変えるための長い連綿、筆圧を加えるところ、放書（はなちがき）（文字を続書（つづけがき）にしないで一



【図5】関戸本古今集



【図６】曼殊院本古今集

字ずつ切り離して書くこと）など非常に参考となり、魅力を感じるところの多い古筆だと思います。

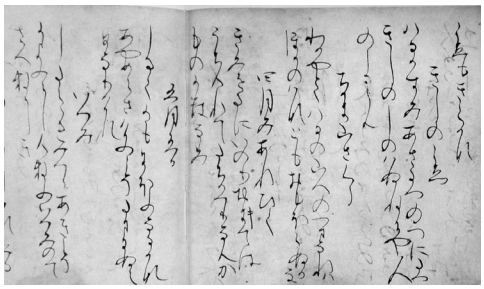
「曼殊院本古今集」【図６】は、とにかく線がすっきりしているのが特徴です。和歌一首を４行で複雑な文字もあまり使わずに書かれています。アクセントを行頭に持ってくる傾向があり、要所での太い線とすっきりした線との組み合わせが絶妙です。「関戸本古今集」と比較すると、筆が立っており穂先を生かしながら書かれているため、非常にさわやかな印象を受ける古筆です。

この辺りまでの古筆は仮名が出来上がった時代のもので、線がすっきりしているというか、線が生きているまたは瑞々しいという印象を受けます。言い換えれば、筆先の抑揚による機能が生かされているため、線に弾力があり、澄んでいてとても奇麗なため窮屈さがありません。「荒野切」にしても、線の細太や筆の開閉などはどこをとっても筆のバネが生きています。「荒野切第二種」においても、側筆で粘り強い連綿線があると申し上げましたが、線に抜くところがあり淀みなく流れていると思います。また線が固く見えないのも細い線にも抑揚があるからです。

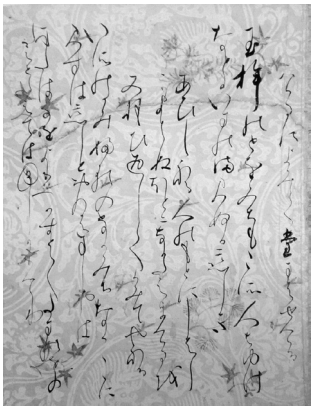
次に平安時代末期から鎌倉時代に入った頃の古筆で、西行系の一つと言われるものを紹介しますが、これまでとは全く趣が違ってきます。西行（法名：円位）の真筆は一点だけありますが、それが「一本経（いっぽんきょう）和歌懐紙（わかかいし）」の中にあります。ある供養のために一本経が書かれたときに、その懐紙の裏側にその時の気持ちを和歌に託すという習わしがあり、その時に書かれたものです。西行系のものには「中務集」【図７】がありますが、「荒野切」のようなゆったりした書風と異なり、直線的で小気味よいところが随所に見られます。直線的でシンプルですが、細い線の中にも抑揚とリズムを感じ、個人的には好きな古筆です。「一本経和歌懐紙」とは穂先を生かしシャープな書きぶりが非常によく似ていることが分かります。

その他にも平安時代以降には変化に富んだ仮名が出てきますが、その中に「本願寺本三十六人家集」の「貫之集下」【図８】と「伊勢集」の断簡で「石山切」と言いますが、「荒野切」の書かれた時代から進むにつれて料紙が工芸的に発達してきます。そのような料紙に和歌を書くという美の意識が生まれ、料紙に合わせて文字を書くようになっていきます。

どんな文化でも活気がありフレッシュで瑞々しい域まで達すると、次は変化に富むようになり、さらに進むと変化が多すぎてどぎつくなり、最後は消えていってしまうということがみら



【図７】中務集



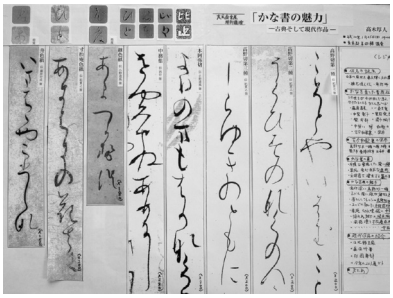
【図８】石山切貫之集下

れます。古筆でもこの時代になると、これまでとは少し異なったリズムの書き方になり、変化の多いものへと移り変わっていきます。

古筆の学び方

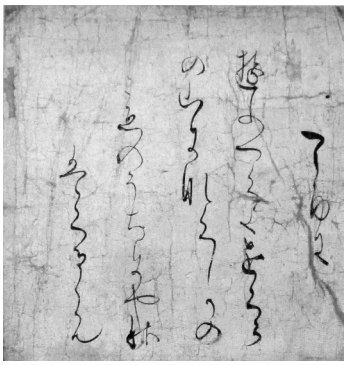
古筆を学ぶ際、「荒野切」「本阿弥切」「曼殊院古今集」などは、そこから何を学ぶべきか目的がはっきり読み取れます。それに対して、その後に発達した古筆は、そこから何を学べばよいか読み取れなくなってしまうという感じを受けます。ですから私の師匠の杉岡華邨先生は、この時代の古筆を学ぶとしても、必要な時に一遍通しで書いてみる程度でよいとおっしゃっていました。ですから、私もこのあたりの古筆は深く学んだことはありません。これは「元永本古今集」というものですが、見開きの料紙に書かれ豪華な作りになっており、味わいがあり鑑賞するにはふさわしいものですが、線を学ぶものではないと考えています。

本日お配りしたプリントは、仮名はとかく小さい字でサラサラ書いてあるというイメージが強いですが、それぞれの古筆を拡大してみるとこんなに表情が異なるということを知っていただければと思い、用意いたしました。例えば「荒野切第一種」は、墨のついたところから一気に落ちていく墨の扱い方をよく学べるかと思います。なだらかに墨が減っていくというのは印象が弱いですから、そういうところを学んでいただければと思います。「荒野切第二種」では、機会があれば本物を見ていただければと思いますが、連綿でどんどん進んでいく粘り強さあるのですが、墨が少なくて薫り（香り）が立ち上ってくるところを感じていただきたいです。「荒野切第三種」は、一番なじみが深くて普段使っている平仮名に近い字が多く、「荒野切第一・二種」と比較するとより若々しく感じます。若々しく感じるということは、文字や線の細太も単純であるということです。それに比べると「本阿弥切」はエッジを効かせ、起筆がしっかり紙に当たり、転折では筆先をしっかり突き、止めてからまた書き始める、まるで紙面をピンで止めていくという隙がないところが魅力だと思います。



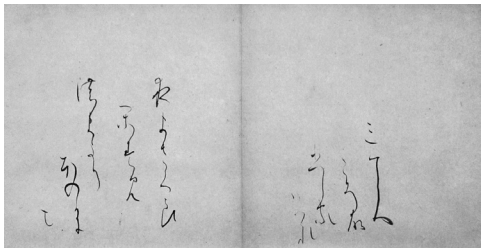
配布資料１

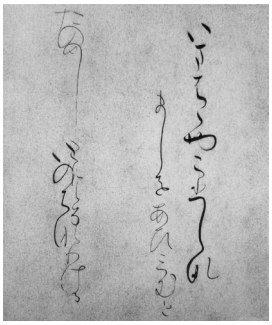
先ほど日比野五鳳先生は、「本阿弥切」を練習して上手くならない人はいないと申し上げましたが、杉岡華邨先生も「荒野切第一・二・三種」「本阿弥切」「中務集」は必修として書きなさい、あとは好きなものを臨書したらよいといつもおっしゃっていました。プリントでは、「寸松庵色紙」「継色紙」「升色紙」の三色紙も掲載しましたが、仮名の魅力の中で「散らし」というものが特徴です。特に「寸松庵色紙」【図９】は存在感がすごいですね。【図　】の部分は比較的最近に発見されて公開されたものですが、書き出しの「つらゆき」のところに物凄く墨が乗っていて、「寸松庵色紙」も中でも一番好きなところです。しかし、ある論文でこの「つらゆき」の部分の墨の強い部分が後の時代の補筆だという内容のものがありました。それ以来、よく見ると確かにそうかもしれないと思ったりもしま


【図９】寸松庵色紙

すが、そうであっても大胆に墨を乗せたところが個人的は好きです。また、行に高低をつけながら書くということが何故生まれてきたのか。おそらく読むというより見せることを優先した書きぶりがそこにはあったのだと思います。次に「継色紙」【図10】は、本当に素晴らしい古筆だと思うのですが、繰り返し練習してもなかなか中心に近づけないところがあります。精一杯に本質へ迫ろうとするのですが、こういう風に書けばいいというものが中々見えないばかりか、近づこうとするのを拒否する不思議な魅力があると思います。他の古筆は、練習を重ねるとこう考えて書けば近づくことができるという実感が持てるのですが、「継色紙」だけはそれが見えないため、形を真似るしかなく、消化不良の思いで練習させてもらっています。それに比べると「寸松庵色紙」は、特徴がつかみやすく書けば書くほど近づいていく気分になることができます。

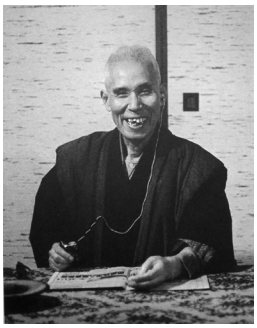
また「升色紙」【図11】の特徴は、太い線で書き出し、一気に細い線を使うだけでなく重ね書きといった行や文字を絡ませるところが特徴です。以前、故高木聖鶴先生がある講演で古筆の中で一番惹かれるのは「升色紙」であり、平安時代の名筆でこれほど惹かれたものはなく、太い線と細い線の絡み合いや特に細い線のそこはかとないところに惹かれ、六十年間も筆を持ち続けてきたとおしゃっていました。それをうかがった時、高木聖鶴先生のダイナミックな墨の入れ方、細い線の絡み合う書風の奥に「升色紙」の特徴を取り入れていることを改めて感じました。このように三色紙はそれぞれに特徴があり、魅力的なものばかりです。好みもあると思いますが、まず学んでみることをお勧めいたします。


【図10】継色紙


【図11】升色紙

日比野五鳳先生について

ここからは、現代の作品ということで日比野五鳳先生の作品を見ていこうと思います。私の中で日比野五鳳先生は、本阿弥光悦以来の書き手だと思っています。あらゆることを学び、あらゆるスタイルを完成させた、この先一〇〇年経ってもこれほどの方は現れないと思われるほどの先生です。五鳳先生(愛知県春日井市で長男として誕生。その後、岐阜県安八郡神戸町で育つ)は、中学時代の恩師である書家の大野百錬先生から漢字を学ばれました。その後、二十歳の時に京都精華高等女学校の教員に就任するため京都へ移ります。女子校ということもあり、仮名も教えられたらということで京都という地を生かし、平安朝の古筆を多く見る機会を得ながら独学で学び、様々な臨書に取り組みます。そして、当時の仮名で有名な先生方に作品を見ていただくのですが、それぞれの先生がそれぞれのことをアドバイスします。その時に日比野先生は、これは自分を信じていくしかないと決断し、作品制作に打ち込むことになります。五鳳先生は、現在ほど展覧会が多くな

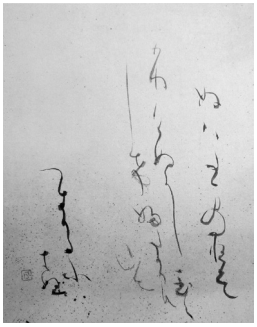

日比野五鳳先生

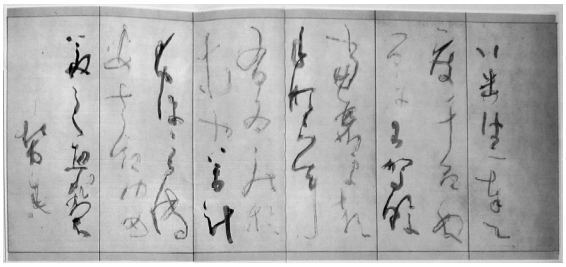
かったもあり、じっくりと古典と向き合われ、それが作品にも反映されていました。五十歳前後の作品には「継色紙」の散らし方、「寸松庵色紙」の行の高さの変化など、作品制作にそれぞれの古筆の特徴を生かした作品が見られます。

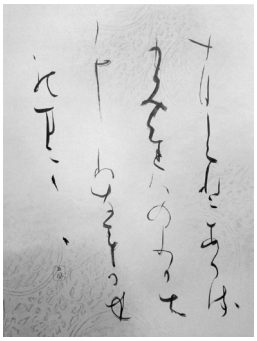
【図12】「ぬばたまのよはふけならし玉ぐしげふたかみ山につきかたぶきぬ」は昭和二十八年（五十三歳）の作品ですが、本当にモダンな感じを受けます。左右の集団に分け、右の集団で墨を抜いて書き続け左の集団で墨を受けるというバランスで書かれており、明るく清々しく伸びやかなところが特徴です。

【図13】（いろは歌）は昭和三十八年（六十三歳）の作品（150×390）です。最近でも様々な展覧会で目にする作品ですが、作品の前に立つと圧倒的な力を感じ魅力的な作品です。また、五鳳先生の作品は小さくても連綿のスケールがとても大きいです。

【図14】（十月しぐれにあへるもみじぢばのふかばちりなむかぜのまにまに）は散らし書きをせず、


【図12】ぬばたまの…


【図13】いろは歌

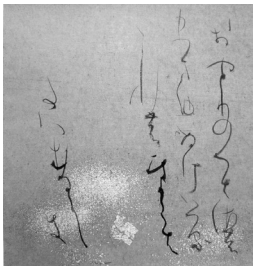

【図14】かむなずき

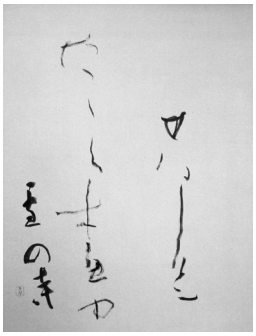
「荒野切第一種」の高い峰から谷底へ一気に落ちるかのような墨の抜き方を生かしたて書かれているのが特徴です。シャープな線で淀みがなく、墨の変化によって紙面からエネルギーを発しています。

【図15】（ひよこ）は五鳳先生の代表的なものですが、色紙よりやや小さい作品です。穂先を生かし、流麗で転折が決まっていながらツンツンせずに揺るぎがない。この作品は昭和四十三年の日展に出品されたものですが、当時、書壇の最高峰の鈴木翠軒先生が、これだけ書けるのは五鳳先生しかいないということから、落款印はなくてよいと言われた逸話のある作品です。さらに五鳳先生の凄いところは、このような作品を一点書くと、もう似たものは書かないという姿勢を取られ、プロの姿を感じざるをえません。

【図16】（せわしげにたたく木魚や雪の寺）は俳句の作品ですが、この作品には不自然さがありません。これは、いろいろな古典で培われたバランス感覚が根底にあると思います。文字を書いているのですが、絵画的なところが凄いと思います。

【図17】（共にさくよろこび）こちらが五鳳先生の絶筆と言われる作品です。五鳳先生の郷里の岐阜県神戸町には「日比野五鳳記念館」があり、そこには２００点ほど収蔵されています。5月と11月に開館され、50点ずつ見ることができます。先生は、毎回異なった作品を書く

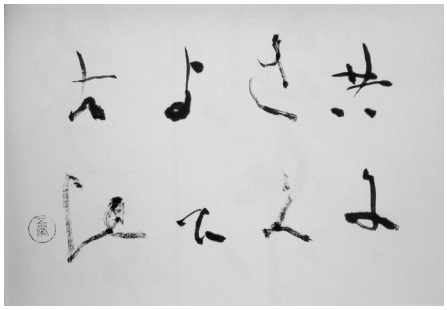

【図15】ひよこ


【図16】俳句

ということで、ある方は毎回変えようとして苦しんで作品制作をしているのはないかと話していました。しかし、それに対して杉岡先生は、人間は歳とともに好きなものや関心も変わるのだから、意図的に変えなくても変わるものだと話され、杉岡先生ご自身もそのような姿勢で作品制作に取り組まれていました。仮名作家の中でも五鳳先生ほど作品が変化した先生は稀だと思います。本日は、現代の作品ということで日比野五鳳先生の作品を紹介させて頂きました。

仮名を学ぶ方は好きな古典が見つかると、形以上によさが感じられてくるものです。おしまいに臨書する時は、律儀に初めから書く必要はないと思います。好きなところを見つけて書くことで良さも理解できると思います。

これで本日のお話を終わらせて頂きます。ありがとうございました。



【図17】絶筆

【参　考】（講演で紹介された主な古筆）

＊荒野切

「古今和歌集」現存最古の写本。全二十巻。選者は紀貫之。三人の手で書かれ、第一種（巻第一、九の断簡、二十）、第二種（第二、三の断簡、五、八）第三種（第十八の断簡、十九の断簡・零本）を残す。

法華経の寄合書の際、最も能書の人に巻第一、八を書くというしきたりに分担執筆の慣習を倣ったものと考えられる。白麻紙に雲母砂子が一面に撒かれた料紙に書かれている。この料紙は「亀山切」「重行集」などにも見ることができる。

〈第一種〉伝紀貫之筆

気品に富む情緒があり、連綿の巧妙さ、墨継ぎの絶妙さは他に比類がない。特に、墨継ぎの部分から極端な渇筆の部分への変化は、絶妙な遠近感を醸し出している。

〈第二種〉伝紀貫之筆　源兼行筆

じっくりと筆を進めるとともに筆管をやや傾けた側筆により連綿線を強調させ、扁平な字形で紙面を縦横無尽に展開することで包容力を持たせている。独特な線質が醸し出す雰囲気は、造形よりも全体像の美を感じさせる。

〈第三種〉伝紀貫之筆

比較的速い運筆とシャープな線質、張りのある字形から流麗で品格の高さを感じさせる。字形に癖がなく自然体でやや緊張感をともなった造形美は、他の二種とは異なった世界を醸し出している。

＊本阿弥切〈伝小野道風筆〉

本阿弥光悦が愛蔵していたことから命名。「古今和歌集」の写本。料紙は唐紙、白、藍、茶の具引地に文様などを雲母で摺り出したもの。文字は小粒で筆の弾力を十分生かしたリズムカルな筆線が特徴であり、書式も自由で変化に富んでいる。古筆の中では同筆を見ない。

＊継色紙〈伝小野道風筆〉

「古今和歌集」「万葉集」の古歌を書写した歌集の断簡。方形の料紙二枚に歌一首を継ぎ書きしているのでこの名が付く。詞書や作者も記さず、歌のみを巧妙な散書きにより書かれている。運筆に緩急抑揚があり、全体的に脱俗超妙にして枯淡の趣があり格調高い書風である。

＊寸松庵色紙〈伝紀貫之筆〉

「古今和歌集」（四季の歌）の写本。十三センチの方形の料紙に詞書を除く作者と和歌のみを散書きしたもの。佐久間将監実勝が京都・大徳寺境内に寸松庵を建立した際に伝来したことから命名。悠揚とした連綿線による作為のない散らし書きは優麗典雅であり、行の傾き、行との響き合いが絶妙である。

＊升色紙〈伝藤原行成筆〉

「清原深養父集」の写本。料紙は雲母砂子を撒き、形が升のような方形から命名。二十九葉三十首が確認。一葉に一首を明るく穏やかな筆線で書かれ、その散書きには大胆な散らしや行を重ね、中には文字を重ねて書くなど大変変化に富んでいる。

＊曼殊院古今和歌集〈伝藤原行成筆〉

京都・曼殊院に伝来したことから命名。第十七巻の残巻（三十一首）。料紙は、藍、浅黄、薄茶、藍、薄藍、藍、浅黄の漉き染めの紙七枚を継いだもの。一首を四行で書き、特定の行頭で墨を継ぎをしている。、繊細にして鋭利かつ清澄な線が、紙面を自由自在に展開されている。しかも自然体で力みがなく、気品に富んでいる。

＊関戸本古今集〈伝藤原行成筆〉

名古屋の関戸家に伝来されたことから命名。鳥の子紙に白、紫、茶、緑など数種の染紙を使用し繧繝彩色の効果を勘案する配列が採用されている。千変万化する躍動的な筆線と字形の優美さ、効果的な墨継ぎ、自由自在に筆を操る巧妙さから書風に格調高さが醸し出されている。

＊石山切伊勢集〈伝藤原公任筆〉

本願寺本三十六人家集のひとつ。かつて本願寺が大阪石山に在ったことから益田鈍翁が命名。料紙装飾技法の粋を結集し、様々な色を用いて一紙ごとに切継、破継、重継、厚様、薄様と斬新な趣向が凝らされている。作者は料紙の装飾を常に念頭に置き、濃い染紙を配したあたりは筆線を太く、白い胡粉の部分は細い線で書くなど全体のバランスを絶妙に計算している。

＊元永本古今集〈伝源俊頼筆

仮名序及び全二十巻を完存する最古の写本。上下二帖の冊子で巻上の末尾に「元永三年（一一二〇）七月二十四日…」と記されていることから命名。装幀は上下ともに二〇〇枚（四〇〇頁）の料紙を大和綴に調じ、和製唐紙、染紙に切箔や砂子を撒いたものと多彩である。筆者は源俊頼と伝承するが、「巻子本古今集」「本願寺本三十六人家集」など一群の能書によるものである。

＊中務集〈伝西行筆〉

三十六歌仙の一人である女流歌人・中務の家集で二二六首を収める。歯切れの良い線質で紙面を切り裂くような運筆が特徴で線の細太がはなはだしく、一回の墨継ぎで三行以上も書くところも見られる。西行真筆と言われる「一本経和歌懐紙」などと比較し類似する面もあるが、自筆の断定は難しい。

【参考資料・図版】

○当日配付資料　高木厚人先生作成

○日本名筆選（1、3、7、12、13、16、19、22、29、34）二玄社

○書道講座④かな　西川寧編　二玄社

○平安かなの美　村上翠亭監修　高城弘一編　二玄社

○生誕一〇〇年記念かな書の巨匠　日比野五鳳展図録　朝日新聞社

第59回太玄会書展

謝　辞

本日は、お忙しい中、私どもの為に、この様な盛大な授賞式を挙行していただき、誠にありがとうございます。

この度は、栄えある賞をいただき、身にあまる光栄と御礼申し上げます。

私事ですが、無我夢中で書き続けていつの間にか三十有余年。長い年月の間には、たいへんと思う時もありました。

書き続けるとことは、大変と思っていたことが本当は、楽しいことをやっていたのだと気づくことができました。

書くことは、やっぱり楽しい。

これからも夢中で書き続けることができる。

改めて、「書道って素晴らしい」と実感しています。

この様に思えるのも、諸先生方の御指導と書友の皆様の励ましがあったからこそだと感謝申し上げます。

この受賞の喜びを力として更なる研鑽を積んで参りますので、今後とも御指導の程よろしくお願い申し上げます。

結びに、太玄会の益々の御発展をお祈り申し上げ、御礼の言葉と致します。

誠にありがとうございました。

平成三十年一月二十一日

第五十九回太玄会書展　受賞者代表　髙　木　爽　快

授賞式風景

謝辞　書星会　髙山爽快氏

授賞式風景

平成29年度　総会

日　時　平成29年4月■日(日)　■時開始
会　場　上野精養軒

（司会・■）

次　第

一．定足数の確認　（■）出席000名（委任状■名）
一．開会の辞　（■）
一．常任顧問挨拶　（■）
一．会長挨拶　（■）
一．議長選出　（■）
一．書記任命　（■・■）
一．議　事
(1)　平成28年度　事業報告　（■）
(2)　平成28年度　決算報告、会計監査報告（■・■）
(3)　平成29年度　事業計画案について　（■）
(4)　平成29年度　予算案について　（■）
(5)　新役員の紹介（理事・実行委員　理事）（■）
(6)　その他
一．書記退任
一．議長退任
一．閉会の辞　（■）

平成28年度　事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
28・4・17	運営委員会 運営委員会・理事会 平成28年定期総会 懇親会	会員復帰の件 事業報告・会計決算報告 事業計画案・予算案審議 役員承認・その他	上野精養軒
5・11	検討委員会 事務局部長合同会議 運営委員会	第58回太玄会書展関係 その他 （学生選抜展・特別講演会）	上野精養軒
7・13	運営委員会	第58回太玄会書展関係 その他 （学生選抜展・特別講演会）	上野精養軒
10・5	検討委員会 事務局部長合同会議	第58回太玄会書展 （併催 第1回学生選抜展）関係 各部進捗状況報告 企画詳細の確認	上野精養軒
12・4	運営委員会 理事会	書類搬入 第58回太玄会書展 （併催 第1回学生選抜展）関係 忘年懇親会	上野精養軒
29・1・13 ～1・24	第58回太玄会書展 （併催 第1回学生選抜展） 1／14～1／24 1／19～1／15 9：30～17：30 一般出品数957点 学生出品数210点 総出品数1167点 （第57回展982点）	搬入 審査（会員賞選考） 審査（準会員・公募） 有岡崖先生による特別講演会 席上揮毫・解説会	東京都美術館
1・22	第58回太玄会書展 （併催 第1回学生選抜展）	授賞式・祝賀会	上野精養軒
3・18	検討委員会 事務局部長合同会議	第58回太玄会書展 （併催 第1回学生選抜展） 反省会 第59回展に向けて 事務局編成について	上野精養軒
4・4	会計監査		錦糸町レバント
4・16	運営委員会 運営委員会・理事会 平成28年度定期総会	役員改選 事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議 その他 懇親会	上野精養軒

第58回 太玄会書展（併催第1回学生選抜展）出品状況

☆総出品点数　1，167点

名誉顧問 常任顧問 理事 監事	19
総務委員	7
理事 実行委員	65
理事	113
審査会員	155
会員	102
準会員	218
公募	278
学生	210

第58回 太玄会書展入賞状況

太玄大賞	4
太玄賞	5
全日本書道連盟賞	5
特別賞	5
奨励賞	7
会員新人賞	9
推選	31
準推選	56
特選	42
準特選	69
入選	167
学生部入選	210

※入場者数　5，341名

事務局各部活動状況報告

◎事務局

（担当　副事務局長　伊東玲翠　江原見山　伊場英白　小出聖州）

28　4　定期総会実施

6　平成28年度会員名簿発行

7　第58回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10　運営委員会、理事会、忘年懇親会への通知

11　牧野商会、美風会への第58回太玄会書展の依頼

12　本展会場打合せ　当番総括　総会会場打ち合わせ

29.

1　第58回太玄会書展開催　有岡　崖先生に依る講演会実施

2　平成29年度定期総会のお知らせ

3　第58回展来場者（各会来賓、その他）礼状及び図録送付

※年間に開催される運営委員会、理事会、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係（本展作品）（年鑑、広告）掲載に関する業務

※住所変更、退会届等 受付処理業務

※東京都美術館平成29年度公募団体展展示室の借館が左記の通り決定

（平成29年4月～平成34年3月）の5年間

太玄会32会期　1月19日～1月26日

◎会計部

（担当　下谷蘓雪）

28　4　平成27年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

総会に向けて平成27年度の決算書、並びに平成28年度の予算案作成

平成27年度会計監査実施

平成28年度総会　決算書、予算案報告、総会受付補助

各社中へ平成28年度会費納入に関する書類並びに依頼書を送付

6　平成28年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼

7　会費領収書を各社中へ送付

10　第58回太玄会書展に関して各部の行動予定の把握　行動費、

経費の算出、資金の準備
第58回太玄会書展書類搬入時の準備
12　第58回太玄会書展の予算案作成、運営委員会に提示
平成28年度理事会忘年会　会費納入受付　公募出品料集計
確認
第58回太玄会書展必要経費準備
29
1　第58回太玄会書展審査会に於ける手当及び経費支払業務
第58回太玄会書展授賞式、授賞懇親会の諸経費準備、支払業務
2　第58回太玄会書展の収支報告書作成
3　平成28年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理
平成28年度決算書、平成29年度予算案作成
平成29年度総会準備

◎事　業　部（担当　蕗野祐涯）

28
5　アオキに会員名札を発注
6　㈱風雅プランニングへ出品規定・出品票（公募用の資料）を送付
7　㈱風雅プランニングとの打ち合わせ、ポスター・ハガキなど全書類送付
8　校正（ポスター・ハガキ・出品規定等）
出品規定・出品票入荷
真仙会・九龍社・鳥跡会三社中の会員名札、及び役職札、事務用品の確認と整理
9　出品規定・出品票を各社中準会員以上へ個人宛に発送
10　㈱風雅プランニングから各社中・各業者へポスターなど書類発送
11　杉本先生に賞状を郵送
29
1　東京都美術館に備品搬入、各社中の役職札の手配
備品の整理
賞札の手配
年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広　報　部（担当　荒井湧山）

28
4　定期総会
9　原稿依頼
部長会にて会報第73号の構成計画を報告　於：上野精養軒
9～11　会報第73号の編集
原稿依頼
（会長）笠原聖雲先生（理事長）西村東軒先生（事務局長）
金丸鬼山先生
（追悼）書星会　燎原社
（特集）菴澤幸楓先生、新井清玉先生、石井玉翠先生、
大窪昇鶴先生、堀越壽嵓先生
各団体事務局担当（所属団体この一年の活動）
28
12　理事会・忘年会　於：上野精養軒
29
1　第58回太玄会書展（審査、会場風景、講演、授賞式、祝賀会）
写真撮影　於：東京都美術館
2　会報の校正
3　会報第73号発行、各社中へ発送

◎渉外接待部（担当　石井蕙園）

28　11　第58回太玄会書展　祝賀会招待状の文面確認し風雅プランニングに印刷依頼

12　住所シール作成案内状発送、祝賀会招待状の発送

29　1　祝賀会最終確認をとり席次表、席札、もぎりの作成

席次表、席札の設置を精養軒に依頼

祝賀会来賓者の受付

◎図　録　部（担当　伊藤慈恩）

第58回太玄会書展作品集

28　10　図録に係る基本方針の作成

29　1　作品撮影　467点　風雅プランニング

（審査会員以上358、会員受賞者21、準会員受賞者87、遺墨1）

編集　風雅プランニング

2　一回目、二回目の校正

発行部数と発送先の確認

図録発行

各社中事務担当者宛発送　風雅プランニング（2／28）

◎搬入出部（担当　稗田影風）

28　10　書類搬入案内書を社中事務担当者に発送

（会計部より受領の払込取扱票同封）

招集通知書を搬出入部員に発送

（書類搬入日・作品搬入日の事務作業の説明書）

12　書類搬入日　事務の実施

書類搬入の受付

社中持参の出品目録等の書類集約

社中別出品者数表の全体表作成

出品者数を理事会にて報告

引き継ぎ事項

審査事務部長に出品者名簿

会計部長に当日納入の出品料

事務局長に出品者名簿・資格別作品出品数一覧表

陳列部長に出品者名簿・作品型式調査票・資格別作品出品数一覧表

その他、担当者に配布

29　1　作品搬入日　事務の実施

作品搬入の受付

搬入数の確認・確定（表装店8社より持ち込み）

役職別・社中別数の確認（社中別出品者数表参照）

資格別作品出品数一覧表・出品目録・社中別出品者数表の確定

事務局長に報告後、審査事務部長に引き継ぐ

作品搬出日　立会の実施

作品搬出の受付

搬出数の確認・立会（表装店8社の引き取り）

◎審査事務部（担当　飛田冲曠）

28　12　・第58回太玄会書展の書類搬入確認（12／4）

・審査事務部処理について打ち合わせ

29　1　・第58回太玄会書展審査事務部打ち合わせ、

役割分担説明（1／13）
・審査手順、作品配置について打ち合わせ
・作品　956点、遺作1点確認
・審査場作成
・作品配置
・成績処理の打ち合わせ
・出品者目録校正
・審査方法打ち合わせ、役割分担確認（1／14）
・風雅プランニングと打ち合わせ
・会員賞選考委員による審査
　会員新人賞の選考審査
　特別賞、奨励賞の選考審査
　太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査
　太玄大賞の選考審査
・入賞者代表謝辞選出
・選考委員集合写真撮影
・選考委員及び当番審査員による審査（1／15）
　推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査
・選考委員及び当番審査員集合写真撮影
・作品管理、成績名簿作成
・褒賞部へ連絡

◎陳　列　部（担当　大場大幹）

28　10　各社中に陳列人員名簿の依頼書類を送付
　　12　搬出入部より社中別出品者名簿と準会員、公募の名札を受け取り出品数の確認
　　牧野商会に出品点数（957点）を連絡し見積りを依頼
　　各社中の準会員、公募名札の確認
　　陳列原案を作成
　　副部長、委員に書類を送付
29　1　搬入日　牧野商会担当者と打ち合わせ
　　準会員、公募作品と名札の確認
　　副部長と打合せ、会場の確認
　　学生部作品の点数、学生の確認
　　陳列日　総人数約64名、15時半終了
　　初　日　9時より副部長と名札、賞状等の再確認
　　最終日　14時半終了、名札等の取り外しと整理

◎褒　賞　部（担当　小泉興起）

28　12　精養軒担当者との打ち合わせ（12／4）
　　副部長との打ち合わせ（12／4）
　　委員へ日程表を配る（12／4）
　　リボン・事務用品の確認と補充
　　松下徽章へ賞品のメダル発注
　　野口商店へ賞状入れの筒発注
　　額（太玄大賞分）購入
　　事業部へ賞状の発送依頼（揮毫者宛）
29　1　審査終了後、各社中へ受賞代表者申告用紙を配布、
　　その後集約（1／15）
　　呼名簿の依頼（1／15）

代表者名簿の作成
賞状の揮毫と確認
精養軒に式次第を依頼
会場案内図・席次表作成
賞状・賞品等を各社中へ発送（1／22）
会場設営（1／22）
授賞式運営（1／22）

◎祝賀会部（担当　大河原由佳）

28. 11　各社中の事務担当者に依頼書
（祝賀会出席者希望数・リボン送付先住所氏名）
振込用紙を送付（11／12）
　従来通り立食パーティー、当日受付ありで行う。
12　精養軒と打ち合わせ（12／16）
　委員に書類送付（12／22）
12　当日までの準備
～　・出席人数把握
　・会費納入確認
　・次第の確認
29　・書類作成
1　・看板（舞台上の確認）
　・リボン確認
　・案内表示作成
（揮毫スタンド用社中名表示、テーブル拡大表示、
当日来賓、受付表示、控室案内表示）

各社中に出席者数リボンを指定先に送付（1／11）
精養軒と最終打ち合わせ（1／19）
　人数・テーブル数、進行等

祝賀会　15時00分～　部長・副部長・委員集合、打ち合わせ
（1／22）　15時30分～　仕事準備
　16時00分～　当日受付開始
　17時30分～　会員入場
　17時40分～　来賓入場、祝賀会開会
　19時30分～　祝賀会閉会
来賓退場
会員退場

出席者数　申込み　２４１名
　来　賓　４４名
　当日申込み　３７名
　合　計　３２２名

平成29年度　事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
29・4・16	運営委員会 運営委員会・理事会 平成29年度定期総会	役員改選 総会関係・第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展） 当番審査員決定方法・日程 その他の確認 事業報告・会計決算報告 事業計画・予算案審議・その他 懇親会	上野精養軒
5・10	運営委員会	第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展） 第60回記念太玄会書展関係（60周年記念祝賀会等）その他	上野精養軒
6・14	検討委員会 事務局部長合同会議	第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展）関係その他	上野精養軒
7・12	運営委員会	第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展）関係その他	上野精養軒
10・4	検討委員会 事務局部長合同会議	第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展）関係その他	上野精養軒
12・3	運営委員会 理事会	書類搬入 第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展）関係忘年懇親会	上野精養軒
30・1・8 1・9 1・10 1・19～1／26 1・20 1・21 1・26	第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展） 1／19～1／26 9：30～17：30 〔席上揮毫〕 〔作品解説〕 特別講演会高木厚人先生（予定）	搬入 審査（会員賞選考） 審査（準会員・公募） 陳列 初日 授賞式・祝賀会 最終日	東京都美術館 上野精養軒 東京都美術館
3・17	検討委員会 事務局部長合同会議	第59回太玄会書展（併催 第2回学生選抜展） 反省会　その他	上野精養軒
4月上旬	会計監査		
4・15	運営委員会・理事会 平成30年度定期総会	事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議 その他 懇親会	上野精養軒

平成29年度　役員構成

名誉顧問	梅原　清山	
常任顧問	福田　丞洲	田中　鳳柳
会長	垣内　楊石	笠原　聖雲
副会長	石川　流芳	西村　東軒
董事	春藤　大耿	
理事長	蕗野　雅宣	
副理事長	小原　天簫	宮負　丁香
事務局長	金丸　鬼山	
副事務局長	伊東　玲翠	江原　見山
	小出　聖州	伊場　英白
運営委員	垣内　楊石	石川　流芳
	蕗野　雅宣	小原　天簫
	金丸　鬼山	鈴木　暎華
	伊東　玲翠	江原　見山
	小出　聖州	海野　十方
	下谷　蘓雪	飛田　冲曠
理事・総務	石井　光華	石島　廻山
	木全　珠香	髙橋　江東
	中尾　勝子	
監事	髙橋　心行	中田　珪川
理事実行委員	足達紫鳳　新井清玉	荒井湧山　石井蕙園

石井香村　石井珠翠　石坂翔鳳　伊藤紫香
伊藤慈恩　菴澤幸楓　大岡蘭仙　大河原由佳
大木秘翠　大窪昇鶴　笠井津仙　片倉道子
上嶋桂風　亀ヶ谷深翠　川端敏江　倉持栄秋
黒川白嶺　黒田桂泉　小池鱗華　小泉興起
小林紫雲　小林碧桃　近藤寿泉　佐々木恵陽
佐々木幸葉　佐藤龍聖　嶋田白染　志村恵風
白崎芙楊　汲町恵風　滝澤聖華　田邉艸水
田村昇鶴　柘植金鶏　富久鳴泉　富山虎跑
鳥越新芽　中元泰乗　並木金紫　南部碧章
西澤厚子　西谷香峰　橋本春溪　長谷川溪華
長谷川香濤　稗田影風　蕗野祐涯　吹原草扇
細谷芳月　堀越壽嵒　前川郷石　増田山鄭
増永楊蘭　三上彩風　南　溪石　三根揚煇
村松鳳襟　森　久圃　山内浪華　山口香葉
山村鳳羽　山本白鷗

理事

會田春燕　青木芳濤　浅香麗芳　池田紅華
石黒自耕　板垣芳蘭　板倉建昇　伊藤桐花
伊藤遙山　岩井壹龍　植村暁恵　馬居李帆
浦田楊月　遠藤鈴響　大木暁峰　大竹伯燿
太田芳琴　大畑晃翠　大森鳳城　岡崎翠晃
小野敏之　垣内玉華　勝又慶竹　加藤径石

嘉門瑤泉　川上白鳳　川谷淳子　川本景月
菊野白濤　久保田芳仙　倉田桂華　栗田伯陽
黒川虚白　小泉香園　小堀蘚穂　小宮柳岱
小山泰雲　齋藤孤芳　櫻井玉苑　笹井芝雪
佐藤北峰　清水美代子　下島東僊　下村清子
末永照英　杉浦華英　杉本英華　杉本雅峰
鈴木恵理　須田瑞兆　清宮白鷺　関根暁香
髙橋興擧　髙橋心華　田上洋香　髙山爽快
宝田暁蓮　竹内游月　田中恵康　田中盛觀
田中柳惲　田村麦浪　段野裕子　坪川九翠
徳永みや子　内藤秋麗　中垣郁芳　中西甫子
中村藤香　中森茶月　西澤翠香　新田白楊
長谷川流祥　花澤雙鴻　林　幸恵　林　韶舞
林　鳳仙　林　賢子　原田彩翠　弘田長風
蕗野研涯　福田節子　藤岡悠苑　古谷善子
星野遙涯　細田耕仙　堀　桃泉　真岸京湖
松尾蘭月　松田爽花　御園生溪鳳　三岡翠風
蓑　青松　宮嶋吾風　宮原真玄　宮本芳秀
三好凌香　山内紀隆　山崎寛齋　山﨑琇園
山崎翠嵐　山崎洋子　山下玉水　山田春壽
山田騰沸　山本晧月　湯浅瑞雲　横山恵華
吉田景雲　吉田恵子　渡部越愁　渡辺玲雲

第58回太玄会書展入賞による昇格者

理事へ10名

遠藤 鈴響　太田 芳琴　黒川 虚白　篠原 翠雨
杉本 雅峰　内藤 秋麗　新田 白楊　林 賢子
三岡 翠風　横山 恵華

審査会員へ6名

天寺 雅良　川島 香竟　國松 都佼　杭全 松苑
佐藤 美苗　山口 杏園

会員へ18名

市川 秀苑　垣内 楊玄　加藤 千鶴　釜田 響
菅野 照子　京増 瑞葩　櫻井 碩翠　佐々木華瑤
髙田 歩　田邊 溪祥　時田 大祥　中島 和子
西岡 山州　西村 智範　野村 恵秀　芳賀 光珠
長谷川栄芳　渡辺 高峰

準会員へ33名

阿部 弘信　飯島 綾花　石川 未来　内田 黄鳥
垣内 仁美　加藤 暉川　川井 韶瑞　熊谷 桐慶
栗原 紫翠　古賀 輝煌　小暮 兆琳　小林 洋子
佐藤 蒼艶　猿田 浩子　菅 沙矢香　鈴木 光鶴
髙橋 玉泉　髙橋 蒼功　滝口 栄珠　田嶋 慎仙
玉村 華堂　手川 翠鶴　酡島 召泉　橋本 智津
藤田 寿仙　藤原 芳苑　細渕 金杏　堀井 恕香
増田 澄靖　矢野 松翠　山内 聡華　山田 桂子
山田 光艶

平成29年 事務局構成

事務局長 金丸 鬼山

副事務局長 伊東 玲翠　江原 見山　伊場 英白　小出 聖州

会計部 下谷 蘓雪

事業部 蕗野 祐涯

広報部 荒井 湧山

渉外接待部 石井 蕙園

図録部 伊藤 慈恩

搬出入部 山口 香葉

審査事務部 山村 鳳羽

陳列部 大場 大幹

褒賞部 小泉 興起

祝賀会部 大河原 由佳

学生部 佐々木 幸葉

平成29年度　総会・懇親会風景

平成29年４月16日(日)　会場：上野精養軒

総会風景

西村東軒理事長挨拶

開会の辞　宮負丁香副理事長

笠原聖雲会長挨拶

閉会の辞　小原天簫副理事長

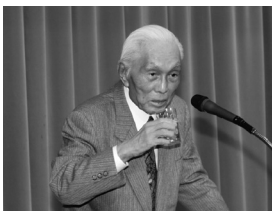
議事報告　金丸鬼山事務局長

司会　伊場英白副事務局長

総会風景　左

総会風景　右

懇親会風景



乾杯発声
田中鳳柳常任顧問

K　会長新旧交代の挨拶

垣内楊石新会長の挨拶

開会の辞
石川芳流副会長

懇親会風景

懇親会司会
小出聖州副事務局長

新運営委員(左から大場大幹氏、下谷蘊雪氏、飛田冲曠氏、海野十方氏)

笠原会長の思い

常任顧問　田中鳳柳

皆様のお手元には昨年の発刊されました会報第７３号が届いて庵、すでにお読みの頂いた方も多いかと存じますが、巻頭で笠原会長は、『「会があなたに何をしてくれか」を期待するのではなく「あなたが会に何を寄与できるのか」を願っている』とお書きになっています。このことは言うは易く、行うは難しことではありますが、非常に重要なことであり、何とか太玄会が書道界で中央的な位置を占めていくためにも皆様のご協力をお願いしたいと存じます。

太玄会の発展を祈って

会　長　笠原聖雲

本日は平成29年度の総会におきましてお忙しい中をご出席いただきまして誠にありがとうございました。太玄会がさらに結束するため目指すことは、この総会に役員である指導者の方たけでなく、お弟子さんにも多くご参加いただくことが大切かと考えます。各団体では師弟関係がございますが、この会は役員であるなしに同じ道を目指す者同士、このことが一番大切なことであると思います。

また、第58回展をはじめその他の事業も皆様のご協力で無事に進めることができましたことに深くお礼を申し上げます。特に第58回展につきましては、学生選抜展を併催することができました。これからの将来の書道界、また太玄会のために活躍をしてくれる青少年の育成を目的に始めましたが、これをさらに発展させるために一番大事なことは、直接指導をされている先生方の意見を頂戴したいということです。本日の議事に関しても多くの方にご発言いただければと存じます。

さらに、第58回展では有岡俊涯先生よりご講演をいただきました。「書の表現は教養主義と表現主義の融合のもとにある」という内容のご講話で大変ご好評をいただきました。私たちは、どうしてもつい表現主義に行きがちです。しかし、私は古典と向き合い、書に関する知識を豊富にする教養主義も大事なことと考えます。やはり、元になるものをしっかり持たなければ、どんな作品も発展性がないと思うからです。私の師は、「書いうものは筆者の人柄がもろに出るから怖いし恐ろしい」と話されていました。私も作品に向かう時は、このことをいつも念頭に置いて制作しています。私たちは、教養主義と表現主義が融合した中で自分を表現することが大事だと思います。こんなことを思いながら、これからも太玄会とともに生きていきたいと思っています。

そして、再来年は60周年記念行事を行う節目の年となりました。60年間の歩みを経た今の太玄会の充実した姿を是非書道界の皆様に見ていただけたらと思っています。15団体が力を合わせて目標を射止めるためにも、今後とも本会の運営にご協力をお願い申し上げます。

皆さんのご健勝とご研鑽をお祈りして挨拶とさせていただきます。

太玄会所属団体のこの一年の活動（平成28年10月～平成29年11月）

書星会

第65回書星展
会　期　平成29年11月10㈮～11月16日㈭
会　場　東京都美術館
代表者　宮　負　丁　香

昨年までは、8月に行っていたが、今回から11月となった。内容は例年通りで、全688点の展示は10尺×12尺等の大作、6曲屏風や10m巻子が第1室を飾り、その後2×8、県展サイズ等が続いた。会期中は、作品解説会・席上揮毫のイベントも行い、約3500名にご来場いただき、全日程を終了した。

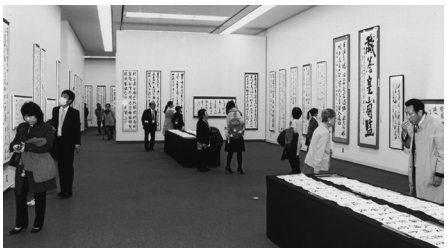
尚、今回は開会前に作品集を完成させるという新たな試みも取り入れた。

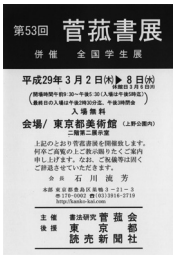
菅菰会

第53回菅菰書展　併催　全国学生展
会　期　平成29年3月2日㈭～3月8日㈬
会　場　東京都美術館
代表者　石　川　流　芳

今年も3月2日から上野の東京都美術館で第53回菅菰書展を開催いたしました。折帖臨書作品と併催の学生展のおかげで、出品点数も前年を上回り390点となりました。連日多くの来場者にも恵まれ充実した一週間となりました。

一年間の成果を発表する場をもてることに感謝し、次回に向けて作品のレベルアップを目指し、更なる研鑽を積んでいきたいと思います。



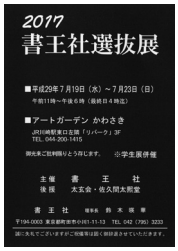


書王社

2017書王社選抜展

会　期　平成29年7月19日(水)～7月23日(日)
会　場　アートガーデンかわさき
代表者　鈴木暎華

会場を川崎駅前に移して2回目の社中展の開催でしたので、勝手がわかり運営もスムーズに進みました。初代会長鈴木景堂先生の作品を囲むようにして広い会場に大人42名、学生40名の作品が展示されました。来場者は900名。授賞式には三世代にわたる姿もみられました。多くの方々の来場に感謝致します。出品者一人一人は、次回にむけての作品の思いや期待を胸に5日間の書展を閉会しました。



書王社条幅研究会

会　期　平成29年10月14日(土)
会　場　神奈川県立武道館
代表者　鈴木暎華

体操競技で大活躍の白井健三選手の母校、岸根高校のすぐ近くに在る神奈川県立武道館が会場です。武道の練習直後の熱気の残る会場で参加者約50名はゆったりと準備し、課題の「終日無車馬」を書き始めました。途中書いた作品を近くの人と見合い、感想を伝えたりアドバイスをしたりして工夫していく姿もみられました。最後に暎華先生から一人一人にご指導も頂きました。蛇足ですが、おやつは文明堂のできたてどら焼で美味しいです。

研友社

第30回記念研友社展

会　期　平成29年10月10日(火)～10月15日(日)
会　場　東京銀座画廊・美術館
代表者　田中鳳柳

毎年、東京銀座画廊・美術館で開催してきた研友社展は、30回の記念展を開催することができました。例年にも増して、60人以上の会員作品を会場一杯に発表することができました。会場中央には田中鳳柳会長が所蔵する中国清の康熙帝時代に活躍した汪士鉉の4,000字近い細字の巻子が展示され、その繊細な筆遣いと一糸乱れぬ線質は、来場者の感嘆を誘う貴重な作品でした。末尾となりましたが、太玄会関係者の方々には、多数ご来場頂き誠にありがとうございました。

錬成会

会　期　平成29年4月1日㈯
　　平成29年7月23日㈰
会　場　埼玉浦和鵞毛堂錬成会場

研友会では、錬成会を春と夏の2回、浦和の鵞毛堂錬成会場を借用して開催しております。春は、研友社が所属している産経国際書展に向けて、夏は、研友社展や太玄会書展に向けての作品指導を中心として実施しています。錬成会は、初心者の方々が、会長はじめとする幹部の先生方から直接指導していただける貴重な機会であり、書道に関する様々な知識、ノウハウを修得できる空間ですので、今後も継続して実施して行く予定です。

研修旅行

会　期　平成29年11月11日㈯～11月12日㈰
会　場　東京出光美術館他
代表者　田　中　鳳　柳

研友社では、毎年秋に研修旅行を実施しております。今年は、東京出光美術館で開催中の「書の流儀」と紅葉を見ながらの軽井沢における「千住博美術館」の見学コースでした。研修旅行となっておりますが、会員相互の親睦を図ることが主目的であり、夜のホテルでは、大いに盛り上がり、今後の書作研鑽に向けたエネルギーを補給することができました。

真　仙　会

第51回真仙会書道展

会　期　平成29年2月23日㈬～28日㈮
会　場　ながの東急百貨店
　　別館シェルシェ5階ホール
代表者　小　出　聖　州

第51回真仙会書道展は2月23日から28日まで長野市のながの東急百貨店5階シェルシェで行われ、163点が出品されました。

併せて行われた第38回学童書道展には303点が展示されました。期間中の26日には学童の表彰式が行われ、真仙賞に輝いた18人ら金銀、銅賞に入賞した代表が出席、賞状と記念品を手にしていました。

またこの日駅前のホテルで出品者の祝賀会が行われ、137人が出席、盛会裡でした。

鳥跡会

書研社

第37回書研社展

会　期　平成29年3月10日(金)～3月12日(日)

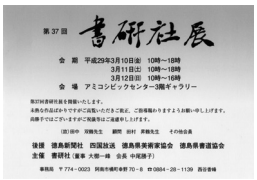
会　場　アミコシビックセンター

代表者　中尾　勝子

書研社は(故)田中双鶴先生が創設され現在に至っている。

毎年5月に総会を開き一年間の行事予定を組み、月1回の割合で錬成会を開き会員相互の研鑽、親睦につとめている。

1年間の錬成の成果を発表するため毎年3月に書研社展を開催。今回は32名が漢字、仮名、調和体、篆刻作品計59点の作品と、協同作品として古筆、法帖の臨書作品を展示した。



耿の会・一心会・書研社

合同錬成会

会　期　平成29年10月29日(日)

会　場　春日会館

代表者　中尾　勝子

鳥跡会は耿の会、一心会、書研社と個人で構成された合同の会である。それぞれの会が独自に計画をたて、錬成会を行い社中展を行っている。

年に一回、三つの会が集まって、太玄会書展のための錬成会を行っている。

それぞれの社中の代表者が講師となり助言や添削、アドバイスを行い太玄書展の作品創りに務めている。

書道研究一心会

第16回一心会書展

会　期　平成29年11月10日(金)～11月12日(日)

会　場　阿波銀プラザ

（徳島市東新町一丁目）

代表者　南　溪石

本年度は、第16回の書展となりました。

会員は一年に数回の錬成会を通し、大作に取り組んできました。

展示概要につきましては、漢字作品を中心に調和体、仮名作品を加え総数五十余点の展示となりました。又漢字作品の中には、臨書作品にも取り組みました。本年は昨年より横作品を増した結果、会場が一層はなやかになったようです。

お陰で盛況裏に終えることができました。

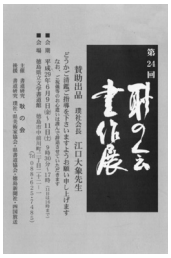
耿の会

第24回耿の会書作展

会　期　平成29年6月9日(金)～11日(日)

会　場　徳島県立文学書道館

代表者　弘　田　長　風



今年で24回目となった耿の会書作展は、出品者三十人の五十五点の作品と学生九十八人の作品を展示しました。

臨書や漢字・調和体の作品を会員の錬成の成果として発表しました。

バラエティ豊かで、楽しい展覧かと好評でした。

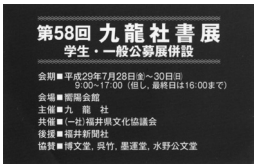
九　龍　社

第58回九龍社書展

会　期　平成29年7月28日金～7月30日日

会　場　響陽会館

代表者　垣　内　楊　石



小学生から一般までの公募の中からの上位入賞者と会員の作品計435点が展示されました。

本年度は会場が代わって行われましたが、ガラス張りのホールは明るく広々としていてとても見やすい展示となりました。内容については多様な大きさや形式に挑戦した作品が多く、見応えのある展覧会になりました。

北陸地方の梅雨明けはまだ発表されていませんでしたが、会期中は晴天に恵まれ多くの来場者でにぎわいました。

九龍社研修会

会　期　平成29年4月23日(日)～11月19日(日)
会　場　ふれいあいみんなの館・さばえ
代表者　垣内楊石

恒例の一泊研修会は台風の影響で残念ながら中止となりましたが、4月から11月にかけて6回の研修会が行われました。

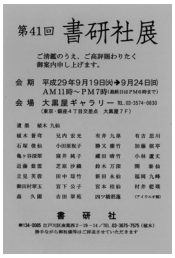
各自が作品制作に取り組んだり添削や鑑別を受けたりしました。切磋琢磨しながら研修を深めるよい機会となっていました。

また臨書作品を持ち寄っての鑑賞会が同時に行われました。一つ一つの作品についての高評の後、優秀作品が選出され、臨書の仕方や臨書作品の作り方について学びました。

書研社

第41回　書研社展

会　期　平成29年9月19日(火)～9月24日(日)
会　場　大黒屋ギャラリー(7階)
代表者　植木蒼穹



本年も銀座の大黒屋ギャラリーで開催され41回めとなりました。

初代会長植木九仙の作2点を含め、植木蒼穹他会員26名が参加。半切大までの作品35点。臨書は何紹基・趙子昂・倪元璐・空海など。

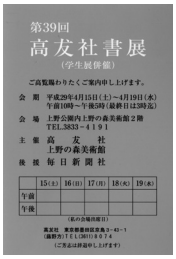
昨年の記念展よりの新参加者も加わり、未熟ながら未来に向けて頑張り始めております。

多くの方に御来場を賜わり、ご高覧戴きましたこと、たいへん嬉しく感謝申し上げます。

高友社

第39回高友社書展（学生書展併催）

会　期　平成29年4月15日(土)～4月19日(水)
会　場　上野の森美術館2階
代表者　蕗野雅宣



今年度も春爛漫の4月中旬、会員117名、学生181名の参加で賑やかに開催された。内容も漢字を中心に、仮名、近代詩文書、大字、篆刻、ペン字など多彩であり、サイズもバラエティーに富んだ作品群が壁面を飾った。学生展も昨年より30点増え、親子、祖父母の観覧も多く、会場は大いに盛り上がった。来年は40回の記念展となり、様々な展示やイベントを企画しております。どうぞご高覧賜りますようお願い申し上げます。

第9回高友社合宿

会　期　平成29年8月27日(日)～8月28日(月)
会　場　ニューウェルシティ湯河原
代表者　蕗野雅宣

恒例の夏合宿に22名が参加した。合宿は、幹部の先生方に直接指導を受けたり、その謦咳に接することができる貴重な機会となる。

又、会員達もお互いに作品について自由な意見交換をするなど、普段はできない体験が得られる。

そして夜は酒を酌み交わし、温泉につかる。短い日程ではあるが、書に携わっている喜びを感じる時間である。

鼎墨会

太玄会に向けての錬成会（合宿）

会　期　平成29年11月4日(土)～11月6日(月)
会　場　河口湖（民宿）
代表者　遠藤有翠

毎年太玄会書展にむけて11月第1土日月の3日間少人数乍ら合宿錬成会を行っている。人数こそ少ないが、お互い相手の良い処を吸収しようと切磋琢磨している様子に、牛歩でも良い。一歩の前進は百歩への道程である事を心強く思う次第である。

青龍会

第47回青龍書展（学生書展併催）

会　期　平成29年4月22日(土)～4月24日(月)
会　場　すみだリバーサイドホール
　　ギャラリー（墨田区役所1階）
代表者　下谷蘊雪

暖かい日差しの季節に正面スカイツリー側の前面ガラス越しに見える新緑が眩しいばかりの会場では、会員達の作品が外の眩しさに負けない様にガンバッテいました。

今年も学生部入賞者作品を一般部会場へ展示しました。どの作品も書いた子供達の顔が浮かぶ力作揃いで頼もしい思いにさせてもらいました。

多くの先生方にお越し戴ただき、励ましのお言葉に感謝を申し上げます。

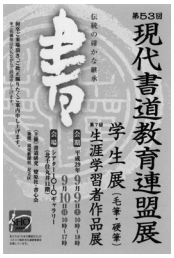
燎原社

第53回現代書道教育連盟展

会　期　平成29年9月9日(土)～9月10日(日)

会　場　シアター1010ギャラリー（北千住丸井11階）

代表者　堀越壽嵜



会場正面の故佐渡会長遺作を中心に、思い思いの自由課題、雪、月、花、を要所〳〵変化に富むよう展示されました。色紙を使った作品がより華さを添えたようです。

学生部は毛硬筆共に前年比二割増の出展で賑やかさを増し、成功裏に終了しました。

平成29年度太玄会所属団体の活動予定

団体名	代表者	活動内容	開催日時	会場
書星会	宮負丁香	第66回書星展	11月10日(土)～11月16日(金)	東京都美術館
菅菰会	石川流芳	第54回菅菰書展	3月1日(木)～3月7日(水)	東京都美術館
書王社	鈴木暎華	2018書王社選抜展	7月18日(水)～7月22日(日)	アートガーデンかわさき
		王会条幅研究会	10月15日(月)	神奈川県立武道館
研友社	田中鳳柳	書作錬成会	3月及び7月	浦和鵞毛堂錬成会場
		第31回記念研友社展	10月2日(火)～10月7日(日)	銀座かねまつホール
真仙会	小出聖州		未定	
鳥跡会	中尾勝子	第38回書研社展	未定	アミコシビックセンター・ギャラリー
	弘田長風	第25回耿の会書作展	6月15日(金)～6月17日(日)	徳島県立文学書道館
	南　溪石	第17回記念一心会書展	10月26日(金)～10月28日(日)	阿波銀プラザ
	中尾勝子	鳥跡会合同錬成会	未定	春日会館
九龍社	垣内楊石	第59回九龍社書展	7月27日(金)～7月29日(日)	響陽会館
		九龍社宿泊研修会	未定	
書研社	植木蒼穹	第42回書研社展	9月25日(火)～9月30日(日)	大黒屋ギャラリー（7階）
高友社	蕗野雅宣	第40回記念高友社書展 学生書展併催	4月15日(日)～19日(木)	上野の森美術館1階及びギャラリー
		第10回高友社合宿	8月26日(日)～27日(月)	ニューウェルシティ湯河原
青龍会	下谷蘊雪	第48回青龍書展 学生書展併催	4月7日(土)～4月9日(月)	すみだリバーサイドホールギャラリー
燎原社	堀越壽嵜	第54回現代書道教育連盟展	9月8日(土)～9月9日(日)	シアター1010ギャラリー（北千住丸井11階）

特集

太玄会を振り返って
―恩師への思い―

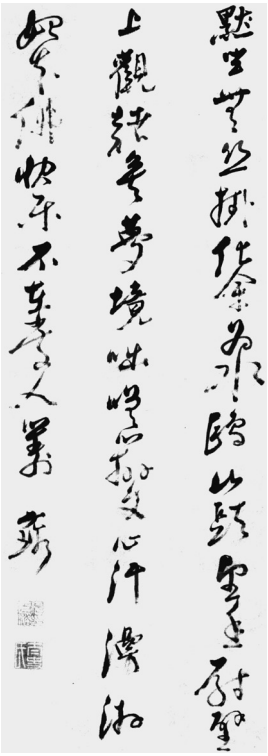
真仙会　石坂翔鳳

第58回太玄会書展におきまして身に余る太玄大賞を頂き有り難う御座いました。これも偏に太玄会会長笠原青雲先生始め選考委員の先生に心より御礼申し上げます。

思いおこせば私と太玄会との出会いはかれこれ四十数年前になります。当時は書に於いては全く未熟でした私に、恩師故滝澤紫塘先生のお勧めで太玄会会員にさせて頂きました。当時は古典の臨書を勉強中のときでした。師からある時倪元璐の書を勉強してみてはと言われ、それが私の倪元璐の書の勉強のはじめでした。師は倪元璐の作品を書くときは、小さな筆でちょこちょこと墨をつけて行間と字間を見ながら書くことで作品を作ると常に言われていました。その時は小筆で書く事は本当に苦労しました。しかし、あるとき倪元璐の書の解説に有りましたことは（彼の書は禿筆もしくは小さめの筆に絹本にこすり付けるように駆使し激しい潤渇でグイグイ運筆してゆくところが真骨頂といえる。枯渋とでも形容すべきの書線は人々に強烈な印象を与えるが、よくその書を見ると、決してその線のみ特徴があるのではないことに気付く。とりわけ余白の妙は見事と言う他ない。行間の美しさは絶品で、やや小ぶりの文字で大胆に行間をとり、加えて勁り線質が否応もなくその白さを際立てる）と書かれておりました。これこそ師が常々私に言われていた事でした。倪元璐の書の深さ、そして師の言葉をようやく理解することが出来ました。

その後第二十七回展に於いて特別賞を頂き、謝辞を行うことになりまして初めてのことで驚き心配でしたが、師のアドバイスを受けながら無事成し遂げる事ができました。その時、師も大変喜んで下さいました。今もその時のうれしさが一番私は心に残っています。何とか書のご指導を賜わったご恩をお返しがしたいと思っていましたので、一つ出来たような気がしましたことを思い出します。

師との思い出は沢山ありますが、書の勉強を兼ねて社中の初めて新潟方面へ研修旅行に行く機会がありました。普段は書に関わりきりの師にみんなで説き伏せてやっと実現する事ができました。良寛の里、会津八一記念館と廻り楽しく過ごしましたが、これが師との最初で最後の研修旅行となってしまいました。



此の四十数年太玄会に携わらせていただきましたが、改めて太玄会のすごさに驚いています。昨今周りの情勢も代わっていくなか太玄会は益々発展されることを祈念します。

最後に今回太玄大賞という大きな賞を頂きましたことは大変うれしく思います。

師なき後奥様（聖華先生）のご指導と真仙会の先生方のご厚情に支えられながら、頂いた賞と受け止め感謝いたします。これからも自分らしく書の道を重ね精進して参りますので、宜しくご指導お願い申し上げます。有り難う御座いました。

思いつくままに

菅菰会　近藤寿泉

入門のきっかけ

私が、そもそも石川流芳先生の菅菰会に入門したのは、次男が中一となり、部活が忙しく書道をやめなければならなくなった時「母親が代りに行ってもいいか聞いてほしい」と言ったところ「どうぞ」と言われたよという事で入門となりました。

子育て終了で書道でまずデビュー

私は、蔭で「だぼはぜ」と言われています。その理由は、なんでも餌にとびつき、のみこんで吐き出す（やめること）が出来ないからだそうです。そこで習っていることを並べると

①月曜日　布に絵や書を書く教室（月一回）
②火曜日　自彊術健康体操教室（週一回）
③土曜日　石川流芳書道教室（週一回）
④　着付教室（月一回）
⑤　料理教室（月一回）
⑥　ゴルフ（随時なるべく参加する）

となり、書道以外は、友人から誘われ始めたもので、二十年～三十

年に亘り、現在継続中です。これからは、ボケ防止と健康のため、続けていければと思っています。

書道の奥深さと苦しさ

石川流芳先生は、初心者には、初心者に合った指導を、経験を積むとその年代に合わせた指導を、時にはきびしく、時にはやさしく適切な指導方法で、およそ三十一年間教えていただきました。今日の私があるのも、先生のお蔭と心から感謝しております。入門当初は、お手本の通りに書くのがやっとのことで、毎月の月例の提出に追われていました。健康には恵まれていて、三十一年間休むことなく毎月先生のご指導を受けて、平成七年師範の免状をいただく事が出来ました。ところが、このあたりからが苦心の連続となりました。書道の奥深さの高い壁に突き当っています。

古典の臨書

石川先生のご指導に基づき、現在は古典の　臨書に取り組んでおります。先生には①多くの古典を自分自身の目でよく見ること。②徹底的に見ることにより、何かがわかるようになること。③繰り返し繰り返し模写すること。その他多くの教えを受けておりますが、現実は道遠しの状態であります。すぐれた作品には作品自体目に見えないオーラがでているかもしれませんが、自分の感性がそれを感じるほど、まだ鋭くなっていないのかもしれません。

①まずすぐれた古典を自分の目をカメラのように考え、脳裏に正確にインプットする。

②インプットした形を自分の感性と合致させ忠実に模写する。

③精神を統一し、一点に集中させた上、自分自身を無とし無意識の状態で運筆する。

私は書とは、見る人の心を和ませるものと考えております。その為には、古典の筆者がその作品に対してどういう思いを込めて書いたのか、その苦脳、喜び、幸せを、その作品を通して感じ取れるようになり、その上で自分の作品に表現できればと思っています。残念ながら今は、古典の入口あたりでウロウロしております。

作品の制作

今は構成を考えることを楽しんでいます。白と黒のバランス、余白のとり方、一行目のまがり具合、二行目三行目に与える影響、運筆の強弱等これらを総合して、最後は無意識のうちに書くようにしております。

これからについて

私は、昭和三十七年主人と二人で開設した会計事務所の経理を担当して、現在に至っています。主人は毎日の料理と事務所の仕事をきちんとやれば、後の時間は「どうぞご自由に」と言っています。現在私の一番弟子は小二の孫でヤンチャな孫ですが、何かと私が三十一年学んだ書道の楽しさを、植え付けようと腐心しているところです。他に孫が二人幼稚園生と一才です。三番弟子まで頑張っていこうと思っています。

恩師との縁

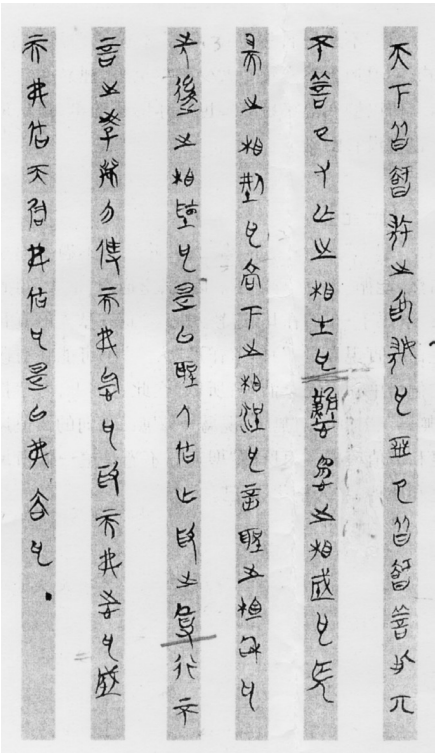
書人社　長谷川　溪　華

山形県鶴岡で生まれ育った私、小学時代の夏休みといえば林海学校と夏期講座に参加する日々でした。習字講座はその一つでした。講座最終日に金銀銅それぞれの色紙を張られた作品を手に友と互いに誉めあい喜びいさんで家路に着いた懐かしい思い出。その頃は、あの幼き日の習字講座。その時の墨の香りが懐かしく書道通信講座をいくつも受けました。でも長くは続きません。市の書道サークルへの入会も試みました。五才と二才の子育ての最中です。「子供を連れての入会は遠慮してほしい」との返事。書をやりたい気持は高なるばかりでした。ある買い物帰り、一軒の家の離だったと思います。カーテン越しに映った一枚の書作品。時の経つのを忘れ観入っていました。昭和五十一年夏の日です。只々指導を受けたい一念で面識のないお宅の門をたたきサークルの講師を懇願致しました。快く承諾して下さいました先生が大学四年の西村東軒先生でした。

昭和五十一年九月書道サークル火曜会発足。競書誌を使ってのサークル活動が始まりました。五十三年には第十九回太玄会書展への出品。緊張と不安の中墨量の事ではいつも注意があり、墨池を足で蹴ってでも墨を付ける事!!の言葉は今でも記憶にあります。その時の作品は呉昌碩尺牘行草でした。太玄会書展を機会に直門へと移り書への意識も深まり、子育てとの両立は時に苦しく時に楽しく、それらがバネとなり励みとなる日々でした。

古典の勉強、公募展出品の中で楚簡に関する資料を収集する事が出来ました。一九九三年十月湖北省荊門市郭店一号墓から発掘されたとする郭店楚墓竹簡「老子校讀書等…これらの資料を参考に平成十三年度から公募展出品をさせて頂いてます。西村先生から楚簡を書く上での注意として　一、筆先だけで書かない事、虚弱になりやすいから。　二、入筆の際に逆筆でぶっつける感じで書き筆力を出すこと。　いつも念頭に励んでる日々です。

心動かされた一枚の作品との出会い。西村先生に師事し四十一年。公募展出品の中、入選、落選、受賞の経験を重ねてまいりました。その中から感謝の気持、優しさ、心の痛みとくやしさ、多くを学びました。私にとっての四十一年は書道のみならず人生そのものと言っても過言ではありませんでした。子育ての中、多くの人に支えられ助けて頂きました。感謝あるのみです。特に西村先生ご夫妻、諸先生方、諸先輩、社中の皆さん、家族、本当にありがとうございました。心から感謝申し上げます。



郭店楚墓竹簡「老子」校讀　一九九三年十月発掘

今後は日本芸術文化の一つである書道を一人でも多くの人に浸透できるよう精進して参ります。今後共ご指導賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

郭店楚墓竹簡　老子甲

第58回太玄会書展　受賞作品の前で

「書」の立ち位置

書星会　長谷川　香　濤

我々、「書」に携わる者は、所属する団体や会派によって様々な主義主張の違いはあるものの、古典の臨書を基盤とし作品制作に活かすことを日々考えていることに違いはないであろう。その「書」は、年間、数多く開催されている「書展」こそが発表の場であり、各自の作品が評価・鑑賞される場として「書展」が開催されているとも言える。芸術作品の発表されるステージとしては、ある意味環境が整えられているわけである。

本来「芸術」とは、昇華された存在であり、その道を追究している者でなければ理解に至らなかったり、語れなかったりするものでもある。そう考えると、様々な書展において、多くの書作品を前に、その表現意図や作品制作の苦労話などに花を咲かせ、良い評価の作品に賞が与えられ、盛大な授賞式や祝賀懇親会が催されるというパターンを構成する「書展」は、制作者の励みにもなっていることは事実であるが、その「書展」が極めて限られた範囲の人たちによって構成された閉鎖的なものであり、その限られた範囲以外の人々の介入はほとんどない閉塞性の高い自己満足の世界になっているのではないかと感じる

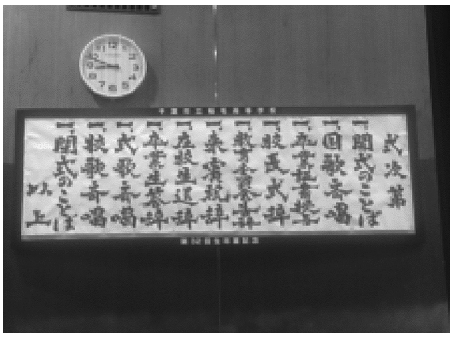
ことがある。もちろんそれぞれの「書展」は、主義主張があるもので、その中で切磋琢磨することは各自が研鑽を積む上で大切であり、その同じ主義主張のメンバーで極めて行くことは道の追究には不可欠であり、否定もしない。ただ、私の感じているのは、「書展」が「書」に携わる者だけのものとしてしか機能していないのではないかということである。実際、「書展」の来場者はどのような人か。出品者とその関係者等がほとんどという実態がある。「書」に携わっていない一般大衆は、その「書展」を目にすることはよほどのことがない限りないわけで、その存在や活動についても知る由がないというのが実情ではないだろうか。

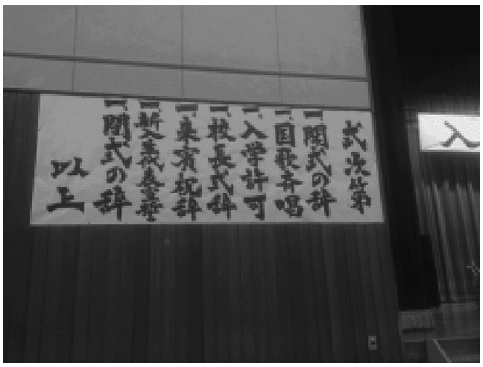
太玄会に所属して活動されている諸先生方の中には、ご自分の制作活動の他にも「書」を通じた様々な活動をされている方も多いと思う。例えば、子供たちに教えている等。これは、「書」のこれからを考える上で、大切な活動である。ところが、一歩間違えると恐ろしいことにもなることを忘れてはならないと思う。子供たちに教えることは、その親なども「書」を目にすることになり、文化の広がりに繋がる点では良いことだ。ところが、その書かれた文字がよろしくないと大変なことになる。まず、教わっている子供たちがよろしくないものをよいと勘違いする。これは間違いなく文化の衰退につながる。また、親たちは「書」に携わってなくとも、その人生経験から指導者の書いた文字をその肩書などは抜きに判断するであろうし、あろうことかあまり良くないと思われたその書き手にものすごい肩書があったりすると、「書の世界はわからないねえ。」と、芸術と大衆の乖離が一層進んでしまうのである。更には、子供たちにも見る目は養われて行くので、自分の書いた作品と他人の書いた作品との優劣はわかってくる。「書展」での受賞結果があやしいと、やる気を失い、もうそっぽを向いてしまうのである。こうして折角の将来を担う逸材を失い、文化自体も自らの手で衰退させてしまっていることに気づかないでいると、もう手遅れなのだ。事実、このような実態があるわけで、閉口してしまう。

私は、教育現場に勤めていることもあり、書道の授業を担当しつつ、学校の様々な場面で、「書」を活かすことが出来る環境にある。そんな中で、学校行事等の大看板や式典における式次第等の掲示物、卒業証書や各種賞状の揮毫、Tシャツの揮毫、刊行物の題字揮毫等々、様々な場面で「書」を揮毫する機会がある。そこで心掛けていることは、学んだ古典の表現は活かして、書式を大切にしながら、多くの人々が目にすることを意識して、その時に自分のできる最大限のパフォーマンスをすることである。自分にプレッシャーをかけながらも、「書」の作品制作をしている時とは違う、何か楽しさや快さをも感じながらの仕事になっている。「書」の作品同様、完成したものは必ず写真に記録し、反省し、次回に活かすようにしている。多くの人々が見るものであるということは、前述した芸術と大衆の繋がりを担うことにもなっているという実感がある。そんな中で、とりわけ「書」に携わっていない人々からの感想も大切にしたいとも思っている。先日もこのような感想が耳に入った。「私は書のことはよくわからないのだが、先生の字を見て何か生き生きとした力強さを感じた・・・」このような言葉は、ある意味大きな「書展」における入賞とは異なるうれしさも感じられるものでもあり、「書」の立ち位置を「書展」にシフトしすぎないという役割を果たせているようで、心地よさをも感じることができる。また、大きな励みにもなっている。

「書」が世間一般に相手にされなくならないように、正しい考え方・

判断力をもって、微力ながらやっていけたらと思っている今日この頃である。最後に、実際に学校現場で自分自身が揮毫したもののうちのごく一部を図版で数点載せて筆を置きたい。





編集後記

第59回太玄会書展が、1月20日(土)から26日(金)まで7日間にわたる会期を無事に終了することができた。今年度は、第2回学生選抜展も開催され、週末は親子連れの来場者も多く、会場は大変に賑わっていた。また、特別講演では、日展会員の高木厚人先生より「かな書の魅力」＝古典そして現代作品＝の演題で、仮名について大変わかりやすく、かつ大変興味深い講話をいただいた。それぞれの仮名の特徴を様々な逸話や映像を通してお話しくださり、大変参考になるとともに仮名の勉強法についても改めて学ぶことができた。また、日比野五鳳先生の作品を通して現代作品についても解説をいただいた。改めて日比野五鳳先生の偉大さも知ることができた。今回、高木厚人先生の講演内容をまとめてみたので、当日ご来場いただけなかった会員の皆様にもお読みいただき仮名の世界の深さ、すばらしさを感じていただければ幸いである。

今回の授賞式祝賀会において、垣内楊石会長のお言葉に今後の高齢化と少子化の中でいかに書道界が生きていくかという内容があった。新しい学習指導要領も全校種が示され、書写書道の方針も明らかになった。さらに高大接続を充実させる流れもこれまで以上に重要視される中で、書道芸術がこれからどのように舵を取るべきかが問われている。そのためにも、これからの若い人たちに書の楽しさ、すばらしさを伝える方法をみんなで考えなければならない。一人ひとりが広い視野で考えていきたいものである。

平成30年3月

広報部長　荒井湧山

平成三十年三月発行
太玄会会報　第73号
発行者　太玄会
編集者　太玄会事務局広報部
制作　㈱風雅プランニング